

『日本アジア研究』第13号（2016年3月）

## 革新の旗を掲げ続けて ——ハンセン病療養所「菊池恵楓園」聞き取り——

福岡安則\*・黒坂愛衣\*\*

国立ハンセン病療養所「菊池恵楓園」に暮らす80代男性のライフストーリー。

長州次郎さん（筆名）は、1927（昭和2）年、山口県生まれ。旧制の商業学校4年のときにハンセン病を発症。1943年8月13日、父方・母方のオジ2人に付き添われて、菊池恵楓園に入所。——聞き取りは、語り手の寮舎にて、2011年7月9日の午前と夕方、計4時間半の長時間に及んだ。聞き手は福岡安則と黒坂愛衣。聞き取り時点で長州次郎さんは84歳。

長州さんの語りは、大きく3つの物語からなる。1つは、母親とふるさとへの想いの発露。長州さんは、幼くして父親と死別しているせいか、母親への想いが人一倍強い。その彼が、小郡駅に見送りに来た母親との別れの場面で、もはや使わない通学定期券を母に渡したとき、母は「ハンカチで」受け取ったという。その悲しみを語る時、長州さんは涙声になっていた。そして、家の跡を継ぐ妹の結婚に際しては、妹の婿に彼がハンセン病患者であることを隠すために、「父親が芸者に産ませた子」との作り話がなされたという。九大病院で「らい病」の診断を下された途端、オジたちに生家へ帰ることを禁じられた体験からか、長州さんはたった一度、1947年にしか「一時帰省」をしていない。それも、人目につかないように夜の闇に紛れての帰省であった。1996（平成8）年の「らい予防法」廃止により、県の事業としての「里帰り」が始まるが、その最初の「里帰り」でも、長州さんが母親と再会したのは、とある公園においてであって、実家の敷居を跨いではない。翌1997年2月に母親は100歳で死亡。その訃報は初七日が過ぎてからであったという。その後も、毎年「里帰り」には参加しているものの、100メートル先のタクシーのなかから実家を望むだけである。

2つは、恵楓園の治療の至らなさへの批判の物語。戦時中の1943年に入所した彼は、敗戦までのまる2年間、陸軍から治験薬として委託された「虹波」の実験台にされ、月に1回は「七転八倒」するほどの胃痙攣に悩まされたという。また、戦後、特効薬として多くの病者に歓喜をもって迎えられたプロミン治療で、「だるい神経痛」症状を来し、手の下垂などの後遺障害をも

\* ふくおか・やすのり、埼玉大学名誉教授、社会学

\*\* くろさか・あい、東北学院大学准教授、社会学

本稿は「JSPS 科研費 22330144, 25285145」の助成を受けた研究成果の一部である。

なお、語りの表記においては、語り手が発した言葉の「音」を再現でき、かつは「意味」が読者に伝わるための工夫として、「処理（あれ）した」「米軍機（あれたち）」「旦那（おやじ）」「監禁室（あそこ）」といった表記法をとった。（ ）内が「音」であり、漢字表記は編者が文脈的に読み取った「意味」である。また、〔 〕は編者による編集上の補筆である。

つに至った。さらに、恵楓園に眼科医不在の時代にハンセン病特有の虹彩炎を患い、まともな治療を受けられなかった。そのため、白内障を患い、いまでは恵楓園の「白内障友の会」の会長をつとめているという。それと、1948年に園内で結婚したあと、妻が妊娠。当然のこととして、妻は堕胎、そして彼は断種手術を受けさせられた。この体験を語るとき、長州さんは、ふたたび涙声になっていた。

3つは、いまだに革新の旗を下ろさない、「最古参」の、社会党の老闘士の相貌である。長州さんの語りによれば、1926（大正15）年に発足した菊池恵楓園（当時は「九州癩療養所」）の自治会は、当初、園の御用をつとめる側面と入所者の相互扶助に貢献する側面の両面をもっていたが、戦後、軍人軍属の体験をもつ入所者が傷痍軍人としての恩給を給付されるようになると、かれらを中心に保守的な勢力が自治会役員を占めるようになる。それに対して、増重文（ます・しげふみ）らの指導のもと、長州さんたち若手が「革新」の旗を掲げて、園内に社会党支部を結成、多いときには100人以上の党员・党友を結集していたという。自用費獲得闘争、「医者よこせ、看護婦よこせ」闘争などでは、まだ飛行場も新幹線もない時代に、長時間汽車に揺られて東京まで陳情に出かけた話が思い出ぶかく語られる。長州さんは、聞き取りの時点で、入所者自治会の執行部の成立が危うくなっている、自身1961年から途切れることなくならかの役員として尽力してきた自治会が「休会」に追い込まれはしないかと心配されていたが、その後も、会長職を工藤雅敏さん、そして志村康さんが引き継いで、恵楓園自治会は、満身創痍の役員たちの頑張りによって、2015年2月1日に恵楓園を訪問した時点では存続している。

2015年2月1日、2日に、読み上げによる原稿確認と補充の聞き取りをおこなった。

**キーワード：**ハンセン病、隔離政策、ライフストーリー

### 山口県生まれ／一族には陸軍大将も

わたしはちょっと〔本名をだすと〕ふるさとに都合が悪いけん。山口県出身じゃけん、長州（ちょうしゅう）次郎っていうふうにしてくれるとよか。〔これは〕ペンネーム。なんでん、インタビューやらなんやら受けるときやらな〔この名前にしとる〕。

〔わたしは〕昭和2年の7月6日生まれ。ちょうど、こないだ〔誕生日〕やった。84歳〔になりました〕。〔生まれたのは〕山口〔県〕。半分田舎。瀬戸内海〔側の〕交通は便利がええところ。きょうだい3人。

山口県は維新の重要人物がたくさん出てね。うちらへんは、大村益次郎。大村益次郎の〔名前を名乗る〕前は、村田蔵六（ぞうろく）っち言うてな。日本の国の軍隊を作った人。そういう人が近くにおってな。それでやっぱり、奇兵隊やらなんやらで、明治維新を〔やりとげた〕。そういうなかで、うちの一族は職業軍人が多かったんだ。一族には陸軍大将がおりましてな。昭和20年の東京空襲のあたりでは、もう予備役であつたけど、宮中参内（さんだい）したりしてですな。昭和10年代あたりは、うちらへんまだ半田舎じゃけん、人力車に乗って、大将旗を立ててな、帰郷（きごう）ちゅうか、帰ってくるようなところじゃったわけ。

暮らしはまあまあ、なんちゅうか、田畑田畑（たはたでんばた）があつたけえ

な。あんまり仕事もせんで収入はあるようなところで。そういうところで、やっぱり、一族を守るために、軍人ばかりじゃいかんけん、実業家とかな、いろいろ職業、分けて、どういう時代になっても一族が生き延びるような態勢に、親族会議あたりで……。まあ、わたしは子どもじゃったけんな、あんまり知らんけど。

そういうふうなことで育って。とにかく腕白小僧で、隣近所に迷惑ばかりかけよったけども、みんながかわいがって〔くれた〕。昔は、小(こ)部落とかいうと、子どもはみんなわが子とおんなじように育て暮らして。たとえば、吊るし柿をむいて干しちよると、あんまり早う取って食わんように、「あれはまだ渋いけんな」とか、うちうち言うて。小さい子どもみんな集めて遊ぶ。そのころは戦争ごっこばかりじゃったもんな。チャンバラやら戦争ごっこ。それから、山に行つて。うちらへんの山は、赤松が多うして、ものすごい松茸が採れる山でな。もう嘘のようなことがあるけど、1日越しに、大ジョウケ一杯採れよったんだ。——ショウケつて、竹を割つてから、編んで作る、大きな、平べったい籠。——いや、山に採りに行くときには、みんなそれぞれ籠を担いでいく。売る場合に、ショウケに、羊歯(しだ)を下に敷(ひ)いて〔松茸を〕ずうっと並べてな。

そういうことでな、山も田んぼもある、中流ちゆうかなあ。まあ、食うに困るっていうことは、一切ないようなことで。それで、長男がひとりおったけど、長男はやっぱり家を継がにゃいかんって。わたしは次男でな。〔下に〕妹〔がおつてな〕。それじゃけん、まあ〔末は〕職業軍人か、つていうふうを考えておつたと思う。あのころは、「太陽」の陽子<sup>1</sup>の家族同様にな、みんな「兵隊さんになりたい」つていうようなことだったんですよ。で、うちのおふくろの姉さんが110歳で死んだけども、その姉さんに子どもがおらんでな。その姉さんが〔朝鮮の〕京城で、丸ビル会館と銀月荘(ぎんげつそう)とか、いろいろ軍隊相手のサービス業をしておつたんです。それが運がよかつて、山口の湯田の温泉を、そのころはもう物資がないけんな、温泉の開業はできん。ただ買つて〔おいて〕、番をする人がおつたんです。それで、終戦後、なんもかんも捨てて〔朝鮮から〕帰つてきて、湯田の温泉〔旅館〕を始めてから、家業が成績がよくてな。東京の赤坂に山口県人の政治家やらなんやら来てくれるような〔料亭「銀月」を構えてな〕。ときには軍とつながるような。おふくろの姉妹(きょうだい)が、そういうふうな状態。

### 旧制中学繰上げ卒業を前にして発病

わたしは、学校は、尋常小学校6年卒業してな、昭和15年に旧制中学、5年制の商業学校へ入った。あんまり所を言うといかんけど、光田健輔が生まれたところの学校です。わたしも光田健輔さんのお墓にも参つたしな。いま、防府市(ほうふし)の市役所のあそこに胸像があるもん。それで何回か見に行つて、ハンセン病に尽くして文化勲章もろうた人つて書いちゃう。そじゃけん、国賠訴訟が済んだころの里帰り<sup>2</sup>のとき、「光田さんもな、ひじょうにいいこともし

<sup>1</sup> この聞き取りがおこなわれた2011年4月からのNHK連続テレビ小説は「おひさま」で、ヒロインの須藤陽子役を井上真央が演じていた。

<sup>2</sup> 「里帰り」というのは、ハンセン病罹患者の「隔離収容」の業務を率先して担ったこ

たけど、もう半分は、われわれを死ぬるより辛い思いをさせた人です」ちって、県庁の人みんながおるときに話をしたことがあるけども。

〔小学校のときから勉強は好きでしたよ。〕小学校の卒業式のときにな、以上総代で、日露戦争の話を、代表でしたことを覚えちよる。小学校のときには、代用教員で、運動の強い先生がおってな。痩せて「カマキリ」って言われたけど、タナカ先生ちゅってな。ほんとうに厳しい先生じゃったけん、ようかわいがってもらうてな。あのころはもう、相撲以外はなかった。野球も、ちつとはボール投げぐらいあったけども、敵性競技っていうことな。もう相撲だけでしたね。

それから、覚えてるの、まだある。小学校の音楽の先生、1年から6年までおなじ先生で、音楽学校を出ちよったかしらんけん、ワタナベ先生ちゅう女の若い先生。それでも、先生に対して、なめちよって、うちが悪いことばかり、騒動ばかりしたけど、よくしてくれた。あのとき、やさしい先生、困らしたなあと思つてな。いまでん、なかなか〔楽譜の〕オタマジヤクシがわからんです。——それで、〔わたしは菊池恵楓園の入所者〕自治会の会長やら常任委員やら、昭和36年から1年も休まんで、現在まで自治会の役員を続けちよる。いまんとこ、うちが最古参であろうと思うけどな。——戦時中海軍の軍楽隊をしておらした人が〔この〕職員におったわけ。それで、ヴァイオリンとかあらゆる楽器を教えてくれて、〔入所者の〕楽団があったけどもな。そういうやつも途切れて〔しまっていて〕。わたしが文教委員をしちよるときに、再建してな。その音楽のグループは「コアラーズ」って〔名乗った〕。動物のコアラ、あれをもじってな。それで、熊丸〔茂〕園長やら上妻（こうづま）〔昭典〕副園長が「あんたたち、生バンドで歌いなさいよ」ちゅって、おれが歌わんにゃならんごとなったわけ。それで、やっぱり、あのころ、ワタナベ先生に、音楽、よおく教えてもろうちよったら、あんまり恥かかんでよかったのについて思つて。それでもコアラーズの人が付いちよってから、拍子をとって〔くれて〕、「湖畔の宿」を歌（うた）うた。それで、いまでん〔そのときの〕録音をとちよって、「おまえのやつ、持ちちよるぞ」って、からかう人も〔おる〕。

小学校はまだ、〔昭和〕15年卒業じゃけん、〔授業は〕普通にあった。それが昭和18年に学徒動員令が出てな。それでも勉強はほとんどせんで、人殺しの〔稽古〕。銃剣術やらな、行軍やら、部隊移動とかな。そじゃけん、わたしは手足は悪いけど、中隊、大隊ぐらいの指揮はとりきるぐらい〔の指導力は身に付いちよる〕。

〔昭和〕15年に〔中学に〕入って、16年は戦争に入った。それじゃけん、16年ぐらい〔まで〕が、まあ勉強したなっていうぐらい。それ以後は、あんまり勉強はしてない。——むかしの商業〔学校〕っていうたら、通信でも候文（そうろうぶん）で会社と会社のコミュニケーションとる、そういう時代じゃった。それで、英語と中国語。中国語はあんまり〔勉強〕せん〔かった〕。英語は習うたけどね、ぜんぶ忘れた。アハハハハ。使わんけん。

そのときな、いまでも覚えちよるけど、うちの配属将校はな、ヤギっていう

---

との反省のうえにたつて、県の事業として、各ハンセン病療養所にいる山口県なら山口県出身者を山口県内の1泊2日程度の小旅行に招待するものであって、たいていの場合、入所者の故郷そのものを訪ねるものではない。

配属将校。山口市の商業学校とうちの学校兼任でな。革の長靴（ちょうか）履いて、剣を下げて。士官学校出の少尉じゃった。それで、いつときして中尉になったけどな。とにかくな〔規律に〕違反したら、ひじょうに説諭がやかましいたいな。それで、わたしは汽車通学で、その配属将校も汽車通学で来たときがあったいな。そして、むかしは、通学でもちゃんと男女の決まりがあつてな。山陽本線を汽車通学で使っておつたが、10両編成ぐらいあつてな。中学生男子生徒は、1、2年生が前の1両目。3年生、4年生が2両目。5年生あたりが3両目、4両目。女学生は後ろからな……。そうして。ちょうど真ん中へんで、上級生が「あれは、よか女学生や」て、モーションかけたりな。まあ、いまから思うと、〔直接〕話すなんていうことはない。男女〔席を〕同じくすることはできん時代じゃけんあ。

そのヤギっていう配属将校が、学校で全体の監視（あれ）。そして、サイトウっていう准尉が憲兵准尉でな。憲兵ていうのは、犯罪捜査、不正〔の取締り〕。軍隊内の捜査権も持ちちよる。戦時中に、うちがおる間でも2回か、中国に行つて帰つてきたりするわけだよな。そういう人（と）が、家族の構成なんか調べちよつたかしらん、うちに「〔陸軍〕幼年学校に行かんか」「士官学校に行かんか」って、もう〔中学に〕入つた途端に言いよつたたい。それで、いろいろわたしも考えよつて。大きくなつたら兵隊になろうなんていう気持ちもあつたけど、なんか、ひとつ〔気が〕進まんてな。〔いまはむしろ〕勉強したいなあつて思つて。そういうときに、病気が出たわけだよ。旧制中学の4年生のとき。

右手の小指がちょっと曲がつたたい。それと、ここの眉毛の上にちょっと、拾円銅貨ぐらいの斑紋が2つ出た。それで、その配属将校が、一緒に汽車通学をする仲でな、三田尻駅に降りたらな、ちゃんと、おんなし中学校の1年生から5年生まで、ずうっと二列縦隊に並んで、行進して学校に行くわけだいな。そんななかで、最年長の学生が指揮を執るわけ。それで、町の真ん中でも、教官やら配属将校がおつたら、「歩調を取れえ！ カシラア、右い！」って、こうするわけだよ。ちょうど4年生のときにな、わたしも〔指揮を執つたわけ〕。そういうふうなとき、この小指が曲がちよると、見たんでしような。——だいたい4年で繰上げ卒業だつた。〔本来は〕5年の中学の期間が繰上げで、4年の春、卒業になつたわけです。〔その〕卒業前に、残念ながら、うちの担任の教官がな、気が付いて。教員室でやっぱり話があるはずよな。小指が曲がつてくるけん。それで、軍事教練が多いて、いろいろ兵隊とおんなじように、銃剣術やら射撃とか訓練するなかで、「ありや怪しい」っていうふうになつて<sup>3</sup>。

うちの担任の教官〔に付き添われて〕学校から2,000メートルぐらいのところの市民病院〔で診てもらつた〕。そんなときにな、お湯と水、それから、針と筆。それで〔知覚〕麻痺の検査を〔された〕。あとから考えたら、ああ、そこでわかちよつたなあつて思うてな。でも、ぜんぜん、診断が下らん。その次に、山口の日赤に行つた。そこでも「わからん」。3番目に、門司の鉄道病院に行つた。そんなときには、斑紋が額（ここ）だけじゃない、〔左の〕股（もも）のどこにも出つた。皮膚を剥がれてな、採つて、検査した。そこも「わからん」。

最後は、九州大学〔病院〕の皮膚科へ行つた。そこでハンセン病っていうこ

<sup>3</sup> 補充聞き取り。「〔商業学校は卒業〕してない。月謝は、12月までうちのお母さんが納めたけどな。卒業前の3ヵ月〔学校に〕行つとらんけん、中途退学。」

とがわかってな。「この世の中でいちばん悪い病気」って。——この世の中でいちばん悪い病気って、あるもんかっていま思うけど。間違った認識を国も医学界もな、教え込んで、そういうふうには皮膚科の教授が言うた。そして、学生が取り巻いてな、いろいろ問診をしたりな、しよった。そんなときにな、岡山に愛生園というたな。熊本にも恵楓園っていうのがあるって。「県に通知して、2週間以内に療養所（びょういん）に収容することになる」っていうような話じゃったけん。〔九大へは〕父方と母方の人が付いて行った。〔診察の結果は、その付いていった人たちが〕ちゃんと聞いて。うちはもう、後から聞く。それで、わたしは生家（うち）にそれから帰りなし。もう〔家へ〕帰れなかった。小郡（おごおり）の駅の前にいまだんあるけど、石田旅館っていう旅館に「おまえ、ここに泊まれ」て。

もうハンセン病って、診断下ったけん。〔付いて来てくれた人のひとりに〕軍属やらなんやらで南方に行ったオジさんがおってな、空気伝染すつとかなんとかいような話もしよったごとあつたけん。南方にはハンセン病、多かつたじゃろうかな。あの、むかしはな、〔一族に〕職業軍人が上のほうにおれば、その家族はな、危ないところには行かんですんだだ。兵隊にとられる前に軍属で〔行って〕、安全なところでな、暮らせる。そんな軍隊のしきたりじゃった。——それで、そういうことで、ハンセン病ちゅうことで、小郡の駅前の石田旅館に。そのころはもう、食料がないけん、お米を持って行って、朝と晩は食べさしてくれるけど、昼はなんもないんだいな。じゃけん、そのころは、アイスクリームやら、まだ売りよつたもん。それで、そういうとを食べて。〔それが昭和〕18年夏。8月。

それで、そこにも長うおられんちゅうことで、おふくろの姉さんの〔所有する〕湯田の温泉に、管理人といつとき暮らしたこともあるだいな。で、暇で暇でしょうがない。学校にはもう行かれんて思い込んだ。定期券で汽車はどこでも乗られるけん、もうなんか悪いことしたような気持ちがあつて、人と会うことがでけん。そじゃけん、一日中（いちんちじゅう）そこおったり、猿やらなんやらおつたところに見に行ったりして暮らしよつてな。それで、8月の13日にここ、恵楓園に〔来た〕。

#### **親族会議で愛生園ではなく恵楓園に**

うちの母方と父方がな、愛生園と恵楓園に実際見に来た。それで、愛生園は島でな、島流しになったようでかわいそうじゃけん、あそこはやめようちゅつて。恵楓園は、戦時中でも宮崎松記園長、クリスチャンじゃけん、まさか殺されることはないだろうっていうことで、親族会議で恵楓園に入るようになったんだ。うちが恵楓園を希望したわけじゃない。母方と父方が恵楓園と長島〔愛生園〕を実際見に行つて、島流しより、せめて陸地のほうがええつて。そういう〔親族会議の〕話にわたしが立ち会うちゅうことは一切ない。生殺と奪権はぜんぶ、家族親族の采配で。生かすも殺すも、家族親族の言うとおりで、〔ここへ〕来た。

〔うちの〕家族にも親族にも「らい」という名のつく病気した人1人もおらん。どこで感染したのやらなあ。話聞くと、昭和2年7月に生まれて、健康優良児で、あっちこちもう、貸してくれ貸してくれつてな、貸したり預けたりしたらしいもんな。それで感染するかどうかはわからんけど。まあ、一切〔思

い当たる節が] ないでしたなあ。そじゃけん、不思議なこともあるもんじゃちって、みんなして。それで、家族が世間に対してな、やっぱり、困難な生活ちゅうか……。まあ言う人はおらん [かったようだ] けど。「あそこはらい病」なんて言うことを聞いたことないって言うけんな、家族は。うちのおふくろも他人 (ひと) の世話好きで、結婚の仲人何十組でするぐらいに、社交性のあるおふくろじゃったけん、そういうことはあんまりなかったろうけどな。もう、100歳で死んだけど。

うちがいちばん残念だったのは、50人以上おった小学校の友達。それから、旧制中学、150人から200人の [友達]。病気になってこっちへ来て、ふるさとは何十回って里帰りで帰るけど、友達と会うことができんちゅうか、探せば会うてくれるけど、探すと家族に迷惑かけるっていうような感じでな。いまだに1人も会うてない。勉強ができなくなったっていうことよりも、小学校の友達、旧制中学の友達と会えないっていうことがな、ほんと、ハンセン病になって、いちばん辛かった。やっぱり、世の中っていうのはな、人の出会い、人と人のつながりで成り立ちよるでしょ。ハンセン病になっただけで、友達をぜんぶ、100パーセント捨てなきゃならんという国の政策ちゅうかな。国も民間も合わせて、偏見差別を助長するような政策で、いかにもコレラかペストのようにな、空気伝染するようなことで、宣伝して、強制隔離をする。ほんと許せない、ていうかな、もう一切の人とのつながりを捨てざるをえん。捨てさせられた。いまだにな、友達との一言も電話も手紙も会うことも [ないまま]、70年近うなるけどな。

#### 母は通学定期券をハンカチで受け取った

[恵楓園に来るときは] 定期券をわたしは汽車通学で持ちこったわけ。それを返さにかいかん。それで、小郡駅にな、おふくろ一人 [見送りに] 来た。お母さんがな、定期券を受け取るときに、ハンカチで受け取った。[涙声になりながら] いまだん忘れられん。昨日までな——暴れん坊ほど、親になつく人おらんからな——お母さんに甘えて、すがりつくごとようにして暮らしとったに、「らい」と宣告されたら、やっぱり、親もいろいろ、大学 [病院] で話されたことを聞いたんじゃろうなあ。「ハンセン病は恐ろしい病気」「うつる病気」っていうふうに聞いたからか知れんけど、[プラット] ホームでな、定期券をハンカチで受け取った。もう、ハアッ思うてな。ほんと [肉親が] あれだけのことをやっぱり、するように、話を聞いたとったなあ、いまでも思うよ。[別れの場面でおふくろが言ったのは]「療養所 (びょういん) に行ってもな、寝台に寝てばかりおらんで、体つこうて、散歩したりな……」。そして、強制隔離。終戦までは、保健所じゃない、内務省の管轄。サーベルを下げた警察官が来たんですよ<sup>4</sup>。

[恵楓園へ来るときはいわゆる御召列車ではなくて] 普通の列車。商業学校の徽章 (マーク) をつけて、戦闘帽で、革靴履いて、巻脚絆 (まききゃはん) でな。それで、普通のあれで、菊池電車に乗ってきた。入ってから二度とそういうこ

<sup>4</sup> 補充聞き取り。「もう、自分 (うち) はわが家にはおらんけど、サーベル下げた警察官が来て、『消毒をする』って言うけん、うちの母のお父さんが『自分で看護婦を雇ってきて消毒をする』ということで許可を受けたて [聞いたる]。」

とはできんじゃったんだ。

付添いは2人。父方と母方とな、一緒に同行して、恵楓園まで来た。で、最後の晚餐ちゅってな、銀丁（ぎんちょう）っていうデパートがあったんだ、熊本に。ちょうど大通りの見える眺めのいいところにテーブルを取ってな。もう〔昭和〕18年じゃけん、食料がない時分やけど、サンドイッチを食べてな。それで、親族の人はあんまり食わんで、うちへ持たせた。ここに来て、もう麦が半分、米が半分のような食事で喉を通らんと、〔最初の〕2日間、そのサンドイッチ食べてな、暮らしたこと〔を覚えてる〕。

### 妹の結婚では、わたしは「芸者に産ませた子」と作り話

うちはお寺さんとひじょうに近い関係で、毎週日曜日には、お寺にちゃんとお参りして。〔和尚さんも〕毎月〔うちへ〕来て、いろいろ説教やらするようない間柄じゃったけん。〔らい〕予防法がなくなった平成8年の4月の何日だったかな、里帰りのはじめのときに、お寺にも参って、「名前は事情があつて言われんけど、先祖供養してください」ちゅって。去年ここを定年退職したレクリエーション担当の職員（ひと）がな、一緒に付いていって〔くれて〕。うちの妹の婿がそこのお寺の〔檀家〕総代やらしちよってな、まあ、名前言うたら、それこそようしてくれるけど……。ちょっと和尚さんがおらんじゃったけん。その和尚さんちゅうのが、先代の和尚さん。うちの親父が死んで——うちの親が死んだら、学校の校長先生か、お宮の神官さんか、お寺の和尚さんに、後見人頼むもんな。それで、お寺の和尚、後見人っていうたっちゃ、1週間に1回、日曜ごろ行って、精進料理と一緒に食うぐらいで。お経を教えたり、「こぎゃんことしちやいかん」「こぎゃんことせにやあいかん」て言うようなことを聞いた覚えはないけどな。そういうことで、なんちゅうか、先祖に対しての、わたしには罪はないけれども、やっぱりハンセン病にかかったっていうだけで、ひじょうに、友達やら親族あたりにな、迷惑かけたって思うことが、思い出されるな。

〔父親が亡くなったのは〕いくつときだったかなあ、若いときに〔亡くなりました〕。農業技師でな。うちらへん養蚕がものすごい輸出産業でな。もう広い家、蚕で人間が住むところないような。その技師やったけん、ずうっと町を回ってな、指導して。それじゃけん、うちは〔恵楓園に入所したあと〕ちゃんと〔生家から籍を抜いて〕分家をして、〔残った家族に迷惑がかからんように〕処理（あれ）したけど。母の話だけど、妹の結婚のときでもな、〔わたしのことを〕「父親が芸者に産ませた子どもでな、籍には入っちゃるけど、うちの子じゃない」っていうような嘘をついて、婿殿に説明したっていう話。お母さんの子じゃないけども、引き取ってな、育てて、ちゃんとそれなりに〔身の立つように〕して、もう熊本にやって生活しとっとか言うて、嘘をついた。

### 35 量の大部屋暮らし

〔話を戻すと〕分館で入所の手続きをして。なんか、おそらく解剖承諾書かそういうやつに印鑑押して。〔印鑑を押したのは、わたしじゃなく〕オジさん。〔名前？〕そのころまだ、偽名を使ったりするっていうこと、ぜんぜん知らなかった。そぎゃんと聞いたことないけん、もう本名のまんま入る。宗教のことは聞かれたな。浄土真宗。——親族がぜんぶ対応しよったけん。〔わたしは〕



そばにおっただけ。

〔最初の数日間〕新患者収容所。前は、園内の患者地帯にあったんだな。〔そこには〕1週間もおらん。4日か5日ぐらいやな。〔そこへ食事を持ってきてくれたりする係の人が〕うちの部屋の隣の部屋の人でな、両義足。たまがった。後から考えると、園内の患者作業で、手足は悪うしても、比較的体を使わんでできる仕事っていうことで、そういう人がおった。新患者係がな。終戦後は、〔体が〕不自由な人はもう仕事せんでも、互助会ちゅってな、自治会が切手とか煙草代ぐらい、でくる補助をしようたけん。無理して働かんでもええようなな。

〔わたしが恵楓園に入ったとき、ここの入所者は〕昭和18年で1,100人ぐらいじゃなかったかな。よく覚えんけどな。〔戦後になって〕一千床〔の拡張〕が昭和26年、7年ごろできてな。それで、患者が足らんけん、各県に患者狩りをして強制収容。とくに芦北（あしかた）、あっちの水俣のほうは、覆いのないトラックに20何人乗せて来たケースが〔あった〕。

〔わたしが下りた舎は〕18号。35畳の大広間でな。定員20人。それがな、園内作業ちゅって、病棟の重病〔者〕の付添いとか不自由者棟のお手伝いする人たちが泊まり込みじゃったけん、定員は20名であるけれども、実際は12、3名ていうところがある。それで、その35畳の中で、いちばん年配者がいちばん端のほうを取る。だんだん、新患者が真ん中にな、〔自分の居場所を〕取る。

〔舎に下りるときに〕袷（あわせ）と、単衣（ひとえ）の着物（あれ）と綿入れと枕が支給される。官給品。〔そして〕押込みって、布団、夜具を入れるのが、〔幅〕1間（いっけん）じゃけん、〔その〕1メートル80を半分にして、〔それを〕上の段と下の段に仕切って。1間〔の押込み〕を4人が使う。

それで、縦箱（たてばこ）ちゅって、園内の人が園内作業で作る便利な物入れがあっただいな。所持品箱たいな。このぐらい〔30センチぐらい〕の高さでな、このぐらいの幅がある。小さい抽斗（ひきだし）が3つ4つ〔付いていて〕。で、上のあれを引き出したら、事務が執れる机になる。そういう、やっぱり、入所者の知恵でな。そういうやつをみんな持ってた。値段は、うちが入ったところで、安いとで5円、高いとで10円ぐらい。亡くなった人のを〔他の人に〕中継ぎする人がおって、〔中古品を〕買う〔ことができた〕<sup>5</sup>。

〔35畳の部屋の〕北側と南側に押込み〔があって〕、東側に硝子戸と障子がある。で、それに向かって、畳の上に縦箱、机を並べる。20個並べると、もう一杯になる。そんじゃけん、〔35畳といっても〕広くはない。休むとでもな、自分の机の前に、こう、ひっくり返るごたいな。それで、晩は自分の押込みから夜具を出して。——もう、たまがったのは、終戦前じゃけん、蚤（のみ）、虱（しらみ）の多いことな。ありゃあ、進駐軍が来て、DDTを振って、なくなったけどな。進駐軍が来ていちばんよかったとは、蚤、ダニ、虱がなくなったとがですよ。

## 虹波の実験台にされて

<sup>5</sup> 補充聞き取り。「昭和15年から〔昭和〕20年のあいだ、1年に100人を越えて死によったけん。死んだ人がおるけん、安う半額ぐらいで分けてもらえるけん、新品買う人はあんまりおらんかった。」

治療のことを話します。昭和 17 年に第六師団のほうから、「虹波（こうは）を治験薬としてやってくれ」って、宮崎園長に言うてな。わたしは昭和 18 年 8 月に〔恵楓園に〕来て、それに引っかかったわけ。昭和 19 年、昭和 20 年の 8 月 15 日、終戦まで、虹波をした。〔あれは〕ひどかった。それこそな、静脈注射、筋肉注射、吸入。それから、肛門から入れる座薬もあるし、尿道チューブで〔入れるのもあった〕。女性は膣に入れるとか。もう入るところからぜんぶ入れよった。研究じゃけん〔処方には人によって違う〕。うちは、幸い、飲み薬でな。〔飲み薬にも〕水のような流動体から、錠剤、いろいろある。うちは錠剤で、毎日 1 回、3 粒飲んで、〔月に〕90 粒飲まんにやいかん。とにかくな、ひどい胃痙攣を起こしなさい。もう、胃が痛（いと）うしてな、2、3 日ご飯が食べられんようなこと、1 ヶ月 1 回ぐらいある。もともとわたしは胃下垂じゃけん。胃の働きがあんまりよくないけん。それで、とくに胃痙攣が起こって。もう七転八倒するような。〔嫌だと言えなかつたのか、だつて？〕そぎゃんこと言ったら、宮崎園長怒るけん。〔飲んだふりもできなかつたのか、だつて？〕園長室に行つてな、目の前で飲ませるけん<sup>6</sup>。

〔虹波の治療をする人は〕もう虹波〔だけ〕。他のをやると比較がでけんけん。実験じゃけん、〔まだ〕まったく治らい薬を使つてない人を好みよった。新患者〔が実験台に選ばれた〕。——虹波に限らず、何種類も、治験薬は、終戦後もあった。セファランチンとか、いろいろあった。

〔治験薬をやつてない人は〕大風子油やらヒドノコールとかをな。〔ヒドノコールって〕大風子を精製したやつ。5 グラムか 10 グラム、アンプルに入つちよった。それはもう、大風子油の何倍ってカネがかかる。それを個人でな〔入手して〕、鍋で注射器を消毒して、それで吸い上げて、筋肉注射やつて。大風子油を打つ人は不純物が入つて、化膿してな。それ、火箸を炭で焼いちよつて、ジャッと刺し込んで、膿（のう）がダラーッと出ると、治りよった。手術で切つてもろうたりすることもあるけどな。

それで、わたしはいい面もあつたたい。なぜかという、いま C 型肝炎が各療養所でいろいろ問題になつておるけどな。まわし打ちに〔よつて感染したと〕。わたしは C 型も B 型も罹らんじやつたけん、よかつた。

熊本大学の統計では、虹波で死亡した人が 2 名とか何人とか、記録が残つちよるけど。〔実際には死んだ人は〕何十人おつたかわからんけん。もう、ここで火葬しよつたけん。隠坊さん、入園者の焼く〔係の〕人が〔虹波を服用して死んだ人を〕焼いた後、骨がブルーでした。骨までそういう状態じやつた。やっぱり、死ぬ人は、そのころは栄養失調と薬害ちゅうかな、副作用で死んで。〔頼りになる〕家族がおつて、小包でな、家族から援助があつた人は生き残つた。食料が園から支給されるものだけでは栄養失調になつた人が多いんじゃないかな。それで、昭和 20 年に東京の材料廠（ざいりょうしょう）が爆撃でやられて、もう大風子も来なくなつた。衛生材料のガーゼとか繃帯とかも、東京から来んごとになつたものな。

<sup>6</sup> 補充聞き取り。「園長室に行つて、園長の目の前でな、飲まされるわけ。恐ろしかったよ、園長という達（たち）はな。とにかく職員に文句は言われん時代じゃけん。とくに〔その〕親分じゃけえ、そりゃあ。」

### 病棟の付添看護

患者作業はな、最初はやっぱり、病棟の付添い。付添いで、うちは戦時中、かわいそうなことをして。ひとり、四国〔出身〕の人で門田（かどた）さんちゅってな。ここに、早蕨（さわらび）団ちゅって時代物の劇団があつて〔その人はその役者やった〕。その人がな、盲腸で入院して、〔おなじ〕寮の人だけん、2人一組で付添い行かにゃいかんだった。その当時は、手術したらおならが出るまで、腸が動き出すまで、水飲んじゃいかんっていうふうにされてな。それが、大きな体で、頑丈な人じゃったけど、夜中にバケツの水飲んで死んでしまった。付添いで、そんな思い出があるけんな。いまじゃったら、点滴して水分補給できるけど。その当時は、医者が死ぬる前に〔やるのが〕リングル。点滴のことをリングルちゅうた。「リングル打ったけん、もうあの人にはダメだ」ちゅうて言うぐらいやったけんな。

〔当時の療養所の医療はどんなだったか、だつて？〕自治会発足のとき<sup>7</sup>、職員が〔ぜんぶで〕50名ぐらいちゅうた。うちが入ったところは、看護婦さん、20名ぐらいおったかなあ。医者はおることはおったけどな、園長と、志賀〔一親〕さんと、それから、もういっちょ、なんとかいう人（と）がおったけど。もう軍医で召集されたりなんかして。それで、看護婦も、わりと親切っていうかな、よくしてくれた。〔だけど〕「寮の人が具合悪いけん、注射をお願いします」って行く患者地帯と職員地帯の〔境の〕関門には、ちゃあんと〔消毒液の〕水溜まりがあつてな。長靴（ながぐつ）履いた、マスクをして予防着を着た人が、注射しに來たりな。お医者さんでも、自分たちがおる畳の上、莫塵（ごご）を敷（ひ）いて、長靴であがつて診察しよった。いま考えると、ほんともう、ええとこ人権侵害じゃと思うけどな。

### 米軍による爆撃で生き埋めになった人も

〔戦争中に恵楓園も爆撃を受けたか、だつて？〕ああ、6発落ちた。爆弾。20キロ爆弾。グラマン〔が飛んできて〕。わたしが〔いる〕18号と17号の真ん中に落ちてな。防空壕のそばにこんぐらいの柿の木があつたんだ。うちはそこでこうして、見よってな。したら、ちょうどその汽罐場には煙突があるもんな。煙突の上スレスレにな、こっち真向かいに、わたしがおるほうに、爆弾が2個な、シュルシュルシュルルーちゅって落ちてくるとを見てな。よっぽど、違う方向の、向こうの防空壕に入ろうと思ったけど、間に合わんと思って、サッと、柿の木のすぐそばに防空壕の入口があつたけん、入ったけん助かった。で、五寸ぐらいの四角の柱を入口にして、上に土をかぶせちよったけんな。それ入った途端、頭がガンとそれへ打ってな。それで、寮と寮の間の炊事場のコンクリのところ爆弾が落ちてな。むかしの寮は壁土じゃったから、その壁土がもう煙幕のごとして。もう〔爆弾が〕落ちたところから10メートルぐらいのそこ、わたしはおっただい。それで、顔には、壁土の砂がだいぶん剥がれて〔くつついて〕。そのとき、隣の部屋にな、義足の森さんて、うちより10（とお）ぐらい年の上の人が〔おつて〕な。「空襲警報」ちゅって、〔慌てて〕義足の足を巻きよってな、それで押込みに入ったわけだ。東側の押込みに入ったけん助か

<sup>7</sup> ちなみに、菊池恵楓園の前身の九州癩療養所が開設されたのが1909（明治42）年。患者自治会が結成されたのが1926（大正15）年。

った。西の押込みはぜんぶやられてな。その隣の防空壕には3人おったけど、無事だった。うちの部屋は4人(よったり)おったけど、みな無事じゃった。それで、うちは事務所がそばじゃったけん、「18号、やられたけん、加勢してください」「家がぜんぶやられたぐらいで、人間はどうもなっちよらんけど」言うて行ったらな、「爆撃で埋まっちよるけん、そっちのほうにみんな行かにゃいかん」ちゅって。うちの前の12号ちゅうところ、8人生き埋めになつてな。2人が窒息死で、あとはみんな助かったけどな。もう1カ所、女の部屋に落ちて。そこは人畜に被害なかったけど、やっぱり家は破壊された。[うちは]すぐみんなを誘うて、檜山ちゅう山に逃げ込んだんだ。——爆弾落とただけで米軍機(あれたち)は帰らん。煙幕のように土煙がある中をな、機銃掃射で、あんた、機銃打つてな。後から気づいたら、もう、なんもかんもない。ちょうどやられた寮の、うちは18号じゃけど、廊下はずうっと機銃で穴がいっぱいほげて。忘れもせん、昭和20年の5月13日。[空襲はその]1回。

[防空壕は、入所者が]みんな掘って。いまのお寺の区域、礼拝堂がある東側ずうとな、不自由者棟の人を運ぶ防空壕[を掘った]。中は10メートルぐらい奥行きがあるとを、3カ所、並べて掘って。空襲警報があつたら不自由者棟の人ぜんぶ、そこに収容した。それで、他に、西のほうにも掘つてな。それもみんな青年団。そじゃけん、青年団の人は食うや食わずで防空壕掘りなんかして、からだ壊した人たくさんおるいう。——[わたしは]青年団でなかった。やっぱり、なんちゅうか、体力とかいろいろ見計らつてな。べつに、うちは病気したことはないけど。恵楓園に来て60何年のうち入院したとは、断種のときの入院とな。断種。筋切り。ワゼクトミー。それから、白内障の手術のときと。それから昭和38年にドブクロを飲みすぎて1週間(笑い)。その3回入院しただけでな。[それ以外には]寝台で病室におつたことない。わりと行水したりな、したけん。

[昭和20年8月15日を覚えているか、だつて?] ああ、覚えとる。大事な放送があると。真空管のラジオが一部屋に1つずつあつて、みんな座つて放送を聞いたけど、ガリガリガリガリ雑音が入つて、「堪へ難キヲ堪エ、忍ビ難キヲ忍ンデ」なんか言わしたことあつたけど、なかなか聞き取れんでな。[やつと] あ、戦争、負けたかなあ、つていうような感じでな。[「おひさま」の]陽子のあれとおんなじこつで、その切り替えが[大変]。いままでは「鬼畜米英」つていうとが、あんた、「アメリカ様様」で。宮崎園長は、やっぱりいろいろ、虹波の問題は日本の軍とのつながり[があつたということで責められる]。[逆に]アメリカのハワイ出身の人をな、白人の患者(ひと)を収容して、それをダシにして、進駐軍からいろいろ衛生材料やら食料やらな[手に入れた]。やっぱり、園長は外交官じゃけん、いい面もあつたよな。まずい食料の時代にな、なんか食事が……。唐芋(とういも)の粉の、苦い、味の無い、だご汁とか食べたけど。飢えて死んだつていうようなことのないように、三度三度食べさせてくれたよな。

### プロミン治療の副作用で手足に障害が

病気は、神経型ちつて手や足が屈曲する型と、全身斑紋が出て病気が進みよる型と、もう一つは、結節ができ、ぶくぶくで、皮膚がやぶれるような型とな、3種類がある。それで、プロミンが昭和23年に第1回が来て。ぶくぶく結

節が出た人を優先して、プロミン打ったもんな。それで、一人一日5シーシーずつ、日曜祭日を除(の)けて、静脈注射。わたしは神経型で、急に病気は悪うならんちじゃけん、〔昭和〕24年に始めた。それから半年か1年くらいしたかな、そうしたら猛烈な神経痛がきたんやなあ。それで、手が下垂したりな、悪くなって。あんたたち聞いたことがあるかもしれんけど、〔このハンセン病は〕自然治癒っていうのが15パーセントから20パーセント〔はある〕。〔なかでも〕神経らいの人はな、もう自然に治って、病気がぜんぜん進まん。とくに、口が曲がる、ここでは〔自治〕会長の工藤〔雅敏〕のような、あぎゃん人はもうまったく治療せんでもどうもならない。わたしは〔プロミンを打ったことでかえて〕病気悪うしてな。プロミンをせんだったら、こぎゃん手足が障害が重くならんでよかった。〔わたしの〕手足の障害はプロミンの副作用でな。なんだかんだ、あの栄養の悪い時代に毎日5シーシーずつ静脈注射すつとじゃねん。それはやっぱり、体にいいはずはない。それで、もうそれこそ神経痛で……。神経痛もな、種類が2つある。ギリギリ針を刺すような神経痛と、それから、だるいだるいで、夜でも手の置きどころを何回も変えにゃいかん、だるい神経痛ちゅうもんがある。わたしはもう、ギリギリ錐を刺すような痛さのない神経痛。もう24時間、だるいだるい神経痛。それで、プロミンやめて、治療はせん。〔それ以来もう治療は〕やったことない。それでもやっぱり〔一度〕麻痺した筋肉は退化してな。脱肉して、だんだん障害が重くなることは、60年経過してみてもあるなあと思つてな。

### 礼拝堂の堂守を3年

〔恵楓園には〕大きな、150畳敷きの礼拝堂があつて。台風で倒れて、いまは〔建て直されて〕「やすらぎ会館」になつちよるけど<sup>8</sup>。終戦後、その堂守を3年した。2人で泊まり込み。〔仕事は〕その掃除。仏壇の掃除。畳150畳を箒(ほうき)で掃いたり。漆で塗った祭壇を雑巾で拭(ぬぐ)うたりな。〔葬式があるときは〕その準備。なんちゅうか、〔当時は〕大きな集会所は礼拝堂と公会堂しかなかつた。そじゃけん、もう大きな集会所のときの準備とかな。

こつちに当直室。ここに祭壇が、真宗から、真言宗、日蓮宗って、いまあるようなのがぜんぶ並んで。で、こつちに職員のお客さんが祭壇に上るような部屋がずつとつながつとる。こつちが150畳の畳で。それで、玄関、土間があつてな。門があつて。上から見たら、礼拝堂がな、十の字になつてな。

それから図書館に2年か3年おつたもんな。それから、不自由者棟の、いまでいうセンター長を〔つとめた〕。一つの寮に20名ぐらい入園者がおつてな。これはちょっと熱があるなつていうと、診察願を書いて出して、医者に来てもらうたり、連れて行つたりな。それから、目薬とか、胃薬とか、鎮痛剤をもらいに〔行つたりな〕。そういう仕事です。

### 革新の旗を掲げて若い者たちで自治会役員に立候補

10年ぐらい不自由者棟のセンター長ちゅうか〔みんなの〕お世話をして。それから、〔昭和〕36年から評議委員〔を手始めに〕自治会の〔仕事にかかわ

<sup>8</sup> 菊池恵楓園の礼拝堂は、1936(昭和11)年開堂、1991年に台風17号と19号の直撃を受けて全壊。1993年、「やすらぎ総合会館」が竣工。

るようになった]。——前は地方自治体と同じ、執行部と議会というような、チェック機能があつて。あれは何年〔だった〕か、中央委員制になって。〔選出された〕中央委員で執行部を作って、共同責任のようになってしたけど<sup>9</sup>。そじゃけん、〔昭和〕36年からずっと今日まで〔自治会の役員をしている〕。それはもう、選挙じゃけん。2年おきには立候補制で選挙じゃけん。選挙はなあ、そら、頭下げて「一票ください」。頭低うせんといかん。そじゃけん、知りべはうちは多かつた。知りべ〔つて〕、知り合い。それが〔多ければ〕選挙にいちばん有利。そじゃけど、いまはもう、うちの元気なときの友達はみんな亡くなってしまつてな。その当時、20人おつた友達(ひと)、入れ代わり立ち代わり、死んだりしたけん。うちが世話しよつたときの入園者、寮員がたつた1人残つとる。

〔自治会役員の選挙に出たのはなぜか、だつて?〕とにかくな、自治会の矛盾ちゆうかな。先輩が幅を利かしてな。新患者をいじめるちゆうわけじゃない〔けど〕、利益誘導ちゆうかな。どこの世の中でもそういうふうになるけど。やっぱり〔うちらは〕若いけん、少しでも住みよい、みんなが平等に相互扶助ができるようになっていうふうを考えてな。いまでも思い出すが、4人(よつたり)一緒に友達が立候補してな。〔4人とも〕通つた。〔増重文(ます・しげふみ)さんも、おんなし〕グループじゃ。〔あの人は〕もうとにかくな、人権思想〔の持ち主〕ちゆうか。沖縄とか奄美の出身の人は本土の人と接するとき、やっぱり一段下つていうような感覚があるやに聞くわけ。〔増さんはその〕奄美の〔出身〕。増さん、奄美で旧制中学かなんか少しは行つておらしたんじやろうな。いろいろ勉強して、俳句を作りましたけどな。

それで、ここの従来の自治会執行部は、保守的な人が支配してきよつたもん。わたしたちは革新の旗を立てて、自治会運営して。もうとにかく、支持政党は社会党中心。いまでも〔恵楓園に〕社民党の党員が2人おるけど、その1人はわたし。そじゃけん、歴代の社会党党首はぜんぶ会つた。石橋〔政嗣〕さんやら、土井〔たか子〕さんやら。もう何回も熊本で会つたり、東京〔へ行つて〕陳情したりな。いまの法務大臣〔の江田五月〕も、民主党におらすけど、お父さんの江田三郎の時代からな、社会党(あれ)じゃけん。何年前に来たときに、「根っからの社会党員です」つて言うたら、喜びよつた。それから、東海大学〔創立者〕の松前重義(しげよし)さん支持してな。その後は〔長男の〕達郎さん支持して。ようあの人はしてくれたよ。東海大学の阿蘇のキャンパス(がっこう)に体育館ができるときには、恵楓園に社会党の支持者が100何人おつたけん。党員は代表党員でな、10人ぐらいおつて<sup>10</sup>、党友つていうとが

<sup>9</sup> 補充聞き取り。「〔中央委員の選挙は〕前は毎年じやつた。現在は2年に1回。いまは、8人の中央委員を選挙で選ぶわけだ。そのなかで会長選挙をまずしてな。そしてあと、常任委員を3人か4人選ぶわけたい。常任委員は涉外〔委員〕とか文教委員とかな〔役を担当する〕。〔残りの人は担当する役は〕ない。審議に加わるだけ。労働組合の制度とおんなし。——そじゃけん、うちは87歳でも、選挙で票が入るけん。去年2月の選挙でやっぱり、3番目に入ったけん、辞めるわきやいかんわけ。ほじゃけん〔まだ中央委員を〕やっちゃるたい。」

<sup>10</sup> 補充聞き取り。「〔体育館の〕こけら落としには〔この〕党員が招待されたたい。あんときの引出物に、煙草盆のガラスのギザギザして、こぎゃん分厚いやつがあつたたいな。もう他人(ひと)にやつたけど。そぎゃんとを一人ひとりにくれた。」

100 何人おった。それはそれはもう、国政選挙っていうたら、ビラ配りから、ビラ貼りから、だいぶんした。三池闘争では熊本市内を〔デモ〕行進したり。そりゃあ元気なときはな、いろいろして。そういうグループが増さん、前田一雄、河村杉男、青木伸一。もうみんな死んでしもうたな。そじゃけん、もう、そういうとを知っとってるのは、わたしぐらい。志村〔康〕君なんか、まあだ社青同じゃった。社会党の青年部。〔当時は〕たくさんおってな、園内で〔社会党の〕新聞配りを社青同の人がしてくれたり、いろいろ園内活動しよった。その社青同の生き残りでも志村1人しかおらん。もう〔みんな〕社会復帰したり〔亡くなったりでな〕。

### 仲立ちあつての妻合わせ

それでは、何から〔話の再開を〕始めようかな。きょうはもう〔家内の見舞いに〕病室に行かんでええけん。ゆっくりでよか。〔結婚の話を知りたい、だって?〕結婚はな、昭和23年の3月10日<sup>11</sup>。当時はな、園内でもやっぱり、男女関係は厳しいからな。その部屋の人なり親戚とかちゅうような人が妻合(めあ) わせるちゅうか、出会いをつくるような。いまのようにな、自由に、「あっ、この人はいいと思う、自分のタイプ」って思うようなことで、声をかけたりすることはありません。それともうひとつはな、療養所に来て、男性でも女性でも、騙されて、ひっつけられて、慰めにされたりな。いろいろ〔難儀〕することが多々あつたと思うけん、そういうことがないように、とくに男女関係は厳しい。仲立ちなり世話係ちゅうかな、そういったものが中心で、男女交際が始まる。わたしの部屋に、男性がおる。その嫁さん〔となる人〕がおる部屋から、その人をうちの部屋に連れてきてな、交流を深めて、妻合わせるっていうような、いわゆる、つくられた仲人(なかうど)ちゅうかな。「あの人はどうですか」って。「あの人はいい人のようだけん、交際……」。交際ちゅうはないいけどな。男性と女性の交際は、父兄同伴たい(笑い)。あくまでも、なんちゅうか、認知されたようなことで、結婚の相手を見つけるちゅうかな。まあ〔時代が〕遅くなつたらな、新患者収容所でだ、よか男性が来た、よか女性が来たっていうと、たとえば福岡県〔出身〕、佐賀県〔出身〕ていうようなことをちよっと聞いて、いろいろ話しい行って、まあ、愛を育むっていうようなこともあつたと思うけんな。

うちの家内は大分県の出身で、昭和19年に強制隔離で3人一緒に女性ばかりで来とるけども、2、3年はそういう気持ちは〔ない〕。病気を治すちうことで恵楓園に来てな。やっぱり、結婚とか恋愛とかいうことはありえん。3年、5年して、園内の日常生活等を考えてみて、夫婦で協力して病気を治すとか、頼りがいのある人を探すとかな、そういう思いが合致して結婚をする。——終戦後はまったく違うけんな。もう自由で、社会主義研究会とかいろいろ

<sup>11</sup> 原稿確認では「うちの結婚は〔優生保護法の〕1年前じゃけん、〔優生保護法の施行が昭和23年なら〕結婚は昭和22年じゃな」とのことであつたが、語りでは一貫して「結婚は昭和23年」と語っており、優生保護法の施行が昭和23年9月11日、結婚が「昭和23年3月10日」だとしても、半年以上の時間の経過があり、「結婚は優生保護法の1年前」との認識とそんなに矛盾もしないと思われるので、ここでは結婚の日時は語りのままとした。

グループができて<sup>12</sup>。[そういう] 集会の中で、思いを伝えながら結婚する人がおったけん。

うちの場合は、大分から〔家内と〕おんなし〔ときに〕強制収容された女性(ひと)がな、たまたま旦那さんがうちのおんなし部屋じゃった。そじゃけん、その人が「あれはどうか」っていうような話でな。話が進んで、結婚をすることになって。それで、昭和 23 年、終戦後じゃけん、物資のない、ほんと披露宴もなかなかできないちゆうような状態の〔なかでの結婚でした〕。菊池〔恵楓園〕の『〔自治会〕50 年史』(1976 年)を見てもらうとな、[当時のこととして]「結婚の簡素化」とかいいろいろ出とる。そんななかで、わたしの場合は、五円五拾銭で嫁さんをもろうた。披露宴代。〔披露宴に出したのは〕不断草かなんかのおひたし。胡麻がないけん、南瓜(かぼちゃ)の種を炒って、胡麻の代わりにしてな。そして、味付けをして。〔味付けをする〕醤油は、結婚する人に対してな、一升か一升五合の割り当て。野菜何貫目でおひたしを作ったりして、披露宴をする。〔ふつうは〕もうそれだけじゃただ。うちは特別に、兄貴分の人が炊事場長をしちよったけん。いろいろ外との関係で、唐芋(からいも)の絞ったやつたいな。〔それを手に入れてくれて〕きんとん〔みたいなの〕ああいふやつを作ってたな。

披露宴の様子は、あんたたちは〔すでに他の人から〕聞いたかどうか知らんけどな、男の部屋のわたしの寮の部屋長さんが、女の寮の部屋長さんにな、「こうこうして、縁組が整ったから、よろしゅうございますか?」って事前に〔挨拶〕しといて。そして、嫁さんを男の部屋に連れてきて、男の寮の人たちに披露して、嫁さんは帰る。そして、旦那さん、わたしはな、男の寮長さんに連れられて、枕を持って、女の部屋に泊まりに行く。女の部屋は定員 20 人の 35 畳に、ずうっと布団が隙間なく敷(ひ)かれておる。既婚者はみんな端のほうにおる。長い寮生活の人がいちばんいいところにお布団を敷(ひ)いて。そして、新しい夫婦(めおと)が真ん中のほうに〔布団を敷く〕。そじゃけん、もう、人権もなんもないような結婚生活。ちょっといまは考えられん。わたしの場合は、相手のほうの部屋長さん、うちの部屋長さんが、園内の有力者じゃったけん、スムーズにいったけどな。〔人によっては〕なかなか思わしくないようなことで、結婚〔生活〕が始まることもあったと思う。

で、その金額がな、お醤油やら野菜やらいろいろンとが五円五拾銭。そじゃけん、うちの家内は五円五拾銭でもろうたような。ハハハハハ。〔家内は〕1 つ違い。1 つ下<sup>13</sup>。

### 妊娠したら墮胎、そして不妊手術か断種か

<sup>12</sup> 補充聞き取り。「〔社会主義研究会は〕社会党の党友とか党員が主じゃったと思う。〔できたのは〕終戦後、何年じゃったかなあ。九州電力の組合の人が講師で来てから、1 週間に 1 回ずつ、読み合わせやらして、勉強会をしてくれたわけ。『資本論』から入ってな。ありゃあ、むつかしい。何回読んでもわからん。それで、新憲法ができたらな、『六法全書』を買って、いろいろ勉強したよ。自分自身の人権を守るため、あわせて、みんなのためにな、やっぱり、勉強せんといかんけん。あれやら、年金法やらな、勉強してから、園と喧嘩腰で交渉してから、認定させよったたいな。」

<sup>13</sup> 補充聞き取り。「〔家内は〕3 年前にな、ガンで死んだ。ちょうど 10 年、ガンで治療しながらな。」



昭和 23 年に結婚したけえ、60 何年になりますかなあ、計算したら。それで、こないだも〔園内〕放送があったけどな、金婚式に該当する人は熊本日日新聞が紙面に紹介してお祝いをすると。記念品をな、くれるようなシステムがずうっとあるわけですたい。でも、わたしは〔結婚〕60年のダイヤモンド〔婚式〕も過ぎたけどな、なぜそれに申し出なかったかという、優生保護法が施行されたとが昭和 23 年や<sup>14</sup>。その当時〔まで〕は、性教育っていうのはまったくなかった。結婚する人（と）に仲人さんが教えるぐらいでな。なんにもなかった。それで〔うちの家内も〕妊娠して、〔それが自分でも〕わからんで黙っちゃって。だいぶ何ヵ月か過ぎて、おんなし女の部屋の部屋長さんがいろいろ家内の体調みてな、「ああ、妊娠じゃなあ」っていうことで話があつてな。そうしてもう、墮胎することが、ふつうの習いちゅうかな、そういうふうな風潮で。〔産むという選択肢は〕ないない。もう自然に、女の寮の部屋長さんと男の部屋長さんが話をして、墮胎をすると。そして、女のほうに不妊手術をするか、男性のほうにパイプカット、断種をするかと。それでわたしの場合、家内が病気が進むといかんから〔男のわたしが〕断種をしてくれんかっていう、部屋長さん同士の話だったんだ。——よその療養所はな、結婚前にパイプカットまたは不妊手術をすることを前提に結婚を許したけど、恵楓園はな、全国に稀でな、子どもができた後でそれやった。墮ろした後に〔夫婦の〕どっちかが、〔女性が〕不妊手術をするか、男性の断種をしなきゃいけない。

これは入園者の 100 パーセントがまったく信用でくる見方ですけど、結節らいで、ぶくぶく結節ができる、眉毛のないような人は、精子があんまり元気でないけん、妊娠しない。わたしのような神経型の人は、精子が活発でな、妊娠の可能性 100 パーセント。そういうことはわかっとしても、よその療養所は、ぜんぶパイプカットか不妊手術をして、結婚を許した。恵楓園は、子どもができてな、はじめて断種したけど。

うちの家内の場合、その当時、性教育も盛んでないけえ、もう〔胎児が〕相当大きゅうなつてな、まったくキューピーさんのような子ども、男の印をつけた子どもがな、ものは言わんけど、膿盆の中で助けてくれえっていうような、手も足も伸ばして。ハート型のな、真鍮（しんちゅう）の膿盆の中に、墮胎児を入れて。ほんと、目の前に見てな。それはもういまでも、ほんと、思い出して、〔涙声になりながら〕涙が出るよ。許されれば、おふくろも元気じゃけん、育ててもらうこともできたらうに思っけど。やっぱりその当時は、習いちゅうか習慣っていうかな、男性の部屋長さん、女性の部屋長さんが話し合つて、墮胎して、不妊手術かパイプカットかして、終わりにするっていうようなことが、ずうっとおこなわれてきた。それが、わたしは、ひとつの心残りでな。ずうっと自治会でも〔問題にしてきた〕。昭和 63 年にな、解剖室にホルマリン漬けになった墮胎児がずうっと並んで〔いたことはわかっている〕。わたしの子どもかどうかはわからんけど、解剖室の大けな硝子の瓶にな、ほんと、子どもの姿

<sup>14</sup> ハンセン病療養所では長年にわたって、法的根拠なしに、ハンセン病患者者に優生手術（墮胎、断種、不妊手術）をおこなってきたが、戦後に制定された「優生保護法」の第 3 条 3 項に「本人又は配偶者が、癩疾患に罹り、且つ子孫にこれが伝染する虞れのあるもの」という文言がもりこまれ、本人の同意を必要とするかたちではあれ、優生手術が合法化された。

をしたアルコール漬け、ホルマリン漬け。それから、足の裏に大きな傷ができて、脚（こ）を切断した標本とかな。肝臓とか腎臓とかのガンのやつもあったかもしれないけど、蓋がちっちゃりして、空気が入ったり出たりしないような、このぐらいの瓶にな、ずうっと並べてあった。それはわたしも何回も見ておる。それで、いまの研究検査棟ができるときに、職員の人が、旧本館、いまの〔歴史〕資料館の2階の、園長室の隣に移したということまではわかっちゃるわけ。

それがどこにいったってどうなったか、調べてもらいよる。それでも、熊丸名誉園長、上妻さん、それから、もう1人（いっちょう）、長島〔愛生園〕の園長になった、〔名前は〕忘れたけど、〔そうそう〕友田〔政和〕さん、そういう人（と）に、携わったかどうかいろいろ話を聞くけど、「覚えとらん」「わからん」ていうようなことで、いまだに全国の13園の中で菊池恵楓園だけ、墮胎児の名誉回復っていうかな、記念碑を造って供養するっていうことができない。それで、こないだの将来構想委員会でその話が出てな、国宗〔直子〕弁護士が、「ひとつひとつ質問状を出して、究明したらどうか」とか、いろいろアドバイスしてもらったけど。「人間の姿をした標本を、あんたたちはどっかに穴を掘って埋めたか、それとも、火葬場に持って行って焼却したか。業務日誌にあるはずじゃ」って。「よおと調べて、明らかにせい」って言うけど、かかわりを否定する人が多（おお）して、どこに埋めたか、捨てたか、火葬場に持って行って焼却したか、まったく明らかにならん。そじゃけん、菊池恵楓園だけはな、墮胎断種も闇から闇に葬られた〔まま〕。毎日新聞の論説委員の三木〔賢治〕さんていう人が来てな、「告訴せんですか」ちっていう話もしてくれたけど。そういう気力はあるけどな、もう、体力がないけんな。まだ若かったら、負けてん勝っても、殺人罪で告訴をするはずじゃった。〔中絶された子どもの〕名前は「太郎」って名前つけちゃった。太郎のために、死ぬまで供養するために頑張りたいと思うて、そういう誘いには乗っておらん。じゃけん、いまじゃたら、1,000グラム以上の新生児（ひと）はみんな助かるっちゃうけんな。もうそれ以上じゃたら。でも、〔看護婦が〕黙あって持って行って、どこに行っただかわからん。ほんとな、残念で残念で。子孫を残すことができんことは、もう、人間としてゼロじゃ。ほんと、思い出したんびにな、かわいそうなことをしたなあっていうふうに思います。

### 里帰りで帰っても遠くから生家を見るだけ

一時帰省はな、家事整理とか、それから親の危篤、これ以外は許可がなかった。わたしが、昭和22年かな、1回帰ったことがあります。はじめて、うちへ帰った。帰っても、〔人に見られんように〕夜帰って。1週間が期限じゃった、その当時な。それで、〔園に戻るのが〕遅れると、部屋長さん以下、監禁〔室〕に収容される。連帯責任。間違いなく期限前に帰らんといかん。そじゃけん、家族と会って、おとなしく〔恵楓園に〕帰ってきたことが1回ある。〔そのときはこれといった用事は〕なかった。〔ただ〕帰りたかった。〔表向きの理由は〕家事整理とかな、ああいうことで。その当時はまだ健康があったけん。ちょっと手が悪かったぐらいでな、どうもなかったけん、自分で切符を買って帰った。

〔おふくろも〕みんな元気でな。喜んで〔くれた〕ちゅうか、その後のいろいろな話からすつと、「兄さんが隠れて帰った」とか「法律違反で帰った」よ

うなことを言う妹もおるけん。その一時帰省が許可されて帰ったっていうふうな認識はなかったようじゃな。法律違反で黙って逃走して帰ったっていうふうな誤解（りかい）しちよるごとあった。

〔一時帰省はそのときだけ。以来ずうっと家には〕帰らん〔かった〕。平成8年に予防法が廃止になって、それで県の里帰り事業〔が始まって、それ以来〕毎年帰るとる。そうして、わたしの〔故郷の〕近くでバスを降りて。熊本のバスで行くと〔恵楓園から来たと〕わかるけん、タクシーに乗り換えて。自分の家の前、100メートルぐらいのところをな、ずうっと〔車を走らせて〕。

〔生まれ育った家は〕変わっとらん。昔の明治時代の家で、古い家じゃけん。様式がな、前が石垣、横が両方石垣っていうような。裏に、蔵があつてな。それで、その前をずうっとタクシーでな、行って。そじゃけん、蔵も、戦時中に、白壁に泥を塗ったりして。昔は、蔵っていうたら、こぎゃん鍵でな、こう、突っ込んでな、それで鍵を開けて。戸の車は、このぐらいの木の車。それで、ガラガラーっと開くような。あんまり大した家財も入っちゃらんけど、わたしが子どもンときには、なんかカビ臭いような、蔵の臭いがして。いまでんな、部落でうちだけが昔の蔵が残っちゃつとる。蔵ちゅうのは、百年ぐらいどうもないなあ。それで、家が、東側が5メートルぐらいな石垣。前が108メートルぐらい石垣。西側が4、5メートルの石垣で、三方石垣で〔囲まれて〕家があつてな。長屋になってる。まったく明治時代の家が、おふくろが、100歳で死んだけど、後のためにな、屋根の瓦を剥いで……。昔の家はぜんぶ、瓦の下は土でな、こうして瓦乗せちよる。それをぜんぶ剥いで、梁やらなんやらぜんぶ取り替えて。だから、また百年大丈夫っていうような工事をして。瓦の漆喰やらなんやらきれえにして。台風なんか〔来ても〕びくともせんようにして、おふくろが亡くなった<sup>15</sup>。

### 母の訃報は初七日が過ぎてから

〔おふくろが亡くなったのはいつか、だつて？ おふくろには〕平成8年に里帰りのときに会うたけん。山口市の公園で会った。〔山口県への里帰りは〕県出身者と一緒に行つてな。うちだけ、おふくろと会った。妹がちゃんと付添いで来てな。それで、そんなとき、シャンとしちよつたけん、もう2、3年はよかろうと思うたら、その明るる年、2月の22日に死んでな。死ぬるときに、「満

<sup>15</sup> 補充聞き取り。「去年、うちの妹が、航空写真を送ってくれた。これが明治時代に建った家でな。お母さんが死ぬるときに、ぜんぶ屋根瓦を変え、漆喰をしてな、あと百年もつようにしてくれて。蔵も、戦時中は泥を塗って真っ黒にしちよつたけど、〔いまは〕きれいになってる。それで妹が、畑におるとがな、写ちよるたい。ちょうど、畑の収穫をしよう。ここはぜんぶうちの畑じゃもん。なんちゅうか、お母さんと約束してな、いっさい、もう帰らんと。『〇〇家が破滅するけん、我慢してくれ』ちつてな。一昨年、妹と甥が来てくれるごとあつてな、『夜中になら帰ってもいいじゃないね』って言うけど、『おれはお母さんと約束しとるけん、もう帰らん』って言うて。昭和22年に帰ったあと、もう全然帰らん。——こっち側はぜんぶ石垣。こっちも石垣だ。ちょっと簡単なお城のような家よ。じゃけん、いまでも帰らんばい、ちゅうて。なまじつかな、こぎゃん家でないなら帰れるわけだ。〔うちの先祖は〕海賊ちゅうか、水軍の砲術指南とかなんとかやったとかいう。昔はそこまで潮水が来よつて、島じゃつたっていったたい。それで干拓して、平地にしてな、田圃にしてしもうた。」

徳院釋慈恵善女(まんとくいんしゃくじけいぜんによ)「つていう法名をもらって。「次郎, [あの世で] 名前を頼って会いに来なさい」つて言うて死んだちゅう。「お母さん, もう財産もなんも使い果たして, 楽しくやっってくださいよ」つて言うても, 明治の女性はな, 嫁いだ先の家を大事にして, 爪に火を灯すようにして家を守ったけん, あんまりいい思いは知らなかったんじゃないかと思うけど。「満足して死んだよ」つて妹が言うけえな。そじゃけん, 毎年7月7日の七夕さんに, 「今度生まれてくるときは, お母さんと一緒に暮らしたい」つて, わたしは短冊に書いております。

[母の葬式には] 呼ばれるどころじゃない。妹からな, 初七日過ぎてから, 「お兄さん, 心を落ち着けて聞いてください。2月22日にお母さんが黄泉(よみ)の国に旅立ちました。ほんと, こういう状態で, お兄さんにごめんなさいつて, お母さんもわたしも思います」つて言うて[きた]。

平成8年の予防法が廃止になって, はじめて, おふくろと会うて。手を握ってな, 「ごめんなさい, ごめんなさい」。もうずうつと「ごめんなさい」つて, うちに言うわけだ。なぜ, そぎゃん言うかちゅうと, 山口県は男性の天下じゃけんな。やっぱり男を立てる。病気になっておるけども, わたしに跡を継がせなきゃならんつていうふうに, 妹もおふくろも考えてな。ほんと, タクシーの隣におふくろ乗ったけど, おふくろが手を握って離さん。お母さんのおっばい, うち吸いたかったよ。[おふくろはもう] 90過ぎちよったけどな。もう, お母さん恋しさで。ほんとうにな, 親子で, こんな辛い暮らし方もあるなあつて思うてな。親も妹も「ごめんなさい, ごめんなさい」つて。もう, 会うて離れるまで「ごめんなさい, ごめんなさい」つて言うばかりで, あんた, 話もでけん。

やっぱり, ハンセン病つていうのが, たいした病気じゃあないのにかかわらず, 官民あげて, 「悪い病気」「危ない病気」「人に迷惑かける病気」つていう宣伝で。東本願寺の天皇陛下の[義理の]妹と夫婦になった人<sup>16</sup>なんか, 長島愛生園に[行ったとき], 「らい患者は, すでに人間ではない」「断種墮胎はやむをえん」つていうふうに言い切っちゃう。いま, 東本願寺の僧侶(ひと)が何十人も, ここに来て, 供養してくれるけどな。過去にそんな皇室と関係のあるような仏教者が, 国の言うとおりに, 人権とかお釈迦様の慈悲とかそういうものをまったく無視してな。いま, 原子力発電所[の事故が起きたけど, 元はと言えば]自民党, 公明党があんな法律を作つて, 国の予算を使って保護育成した。自分たちが原子力発電所を作つて[おいて], それが災害に遭う[て事故を起こし]たら, 原子力の人たちを非難して。まったく, 東本願寺の人とおんなし。過去に自分たちが原子力発電所を育成, 擁護して, 国と電力会社と癒着してな。[原発事故で放射線被害に遭った]住民の人も, いまになって政府に援助が足りないとか言うことは, [原子力]発電所の建設に賛成して, 自分たちの一票を自民党, 公明党に[投じて], そうして箱物やらなんやら多くの利益を地方に[誘引]しておきながら, 自分たちに[都合が]いいことは隠して, いま災害が起こつて, それを現政府に非難轟々(ごうごう)するつていうと

<sup>16</sup> 1924(大正13)年に久邇宮邦彦王の三女で皇后の妹にあたる女性と結婚し, 翌年第24代法主に就任した大谷光暢(おおたにこうちょう)のことを指して言っていると思われる。

は、東本願寺の人の、ハンセン病に対する言い方とまったくおんなじ。やっぱり、自分たちの責任ちゅうか、自分たちの過去を振り向いてな、ものを言うてもらわんといかん。うちは西本願寺のお寺じゃけん、東本願寺の集会（と）にはあんまり行かん。行ったときには、いまのような話をときたまする。あんなたちの先輩が、われわれに対してどういう対応したかっていうことを、あの人たちはよう知つとるが。それで、ずうつとな、来て、供養してくれたり、一部の人を茶話会に呼んだりしよるけど、わたしは1回も行ったことない。

### 藤本松夫さんの手の感触をいまだに覚えている

〔監禁室に入れられたことはないか、だって?〕 ないない。真面目な患者じゃった（笑い）。〔監禁室に入れられた人は知って〕 おる。いまも生きよって〔る人で〕 な、T子さんっていう女性。旦那（おやじ）は大分〔出身〕の人じゃった。その夫婦がな、お母さんが年寄りで、田植え〔の手伝い〕 やらのために逃走してな。無断帰省。大分に長期帰省して帰ってきたときに、監禁室（あそこ）に入っちゃった。〔それは〕 戦後じゃったと思う。それで、わたしの友達に馬場政則っていう福岡〔出身〕の人がおってな、その人に連れられて監禁室に〔行ったことがある〕。こっちから、段が4つか5つか、こんくらいの階段があつてな。それで入って行って。こっち側に夫（おやじ）。こっち側にT子さんがおってな。それこそ座敷牢だ。大きな門（かんぬき）〔がしてあつて〕。見舞いちゅうか、行ったことがある。〔監禁室の〕 現物に接した経験はそれ1回。〔なにか見舞いの品を持っていったか、だって?〕 いや、そんなときは持っていかんじゃったかな。園内の内監禁（うちかんきん）は、ご飯が半分〔にされる〕。〔ふだんが〕 120グラムなら60グラムぐらいじゃったろ。食事はあんまりよくなかった。

それよりなによりな、〔園内に〕 県警の拘置所があつただ。いま、洗濯場があるたいな、あれの東側のところに県警の拘置所があつた。昭和20年代じゃけんな。うちの寮の人の知りべが、そこに入っちゃってな。その拘置所は、板の塀があつてな、内側にこう〔折り返しになっていて〕 逃走できんようになつちよる。そういうところは、やっぱり、煙草とかマッチとかそういうとは一切厳禁のあれじゃけんな。夜中に梯子（はしご）を持って、差入れに付いて行ったことがある。うちはまだ手足がよかったけんな。うちはまだ若かったけん、なにがなんかわからん〔まま〕 付いて行って。うちは、中に入らんたい。元気な知りべの人がな、梯子で中に入って、それで用を足して帰ってきたことを覚えちよるたい。

〔菊池事件の〕 藤本〔松夫〕さんは、昭和26年ごろじゃけんな。そこに入ったかどうか定かでないけどな。うちは、増さんに連れられて、青木伸一さん、それから前田一雄、うちたちのグループの人と一緒に、藤本松夫さんに面会に行った。医療刑務所に行ってな、面会所で対峙して。いまでんな、あの人の手えの感触を覚えちよる。〔握ったら〕 手え、やわあーい感じやったよ。うちはまだ、人権の問題とかあんまり、なまくらの時代じゃったけんな。増さんとか、長良〔敏行〕さんとか、入江〔信〕さんとか、ほんとに人権の問題に対処する姿勢がある人たちと一緒にだったと思う。うちは2回ぐらい行ったと思う。あんな人が、部落でな、ハンセン病って密告されて、収容されて、事が始まるけど。そんな、病気の人じゃなかったよ。病気であつたかしれんけど、まったく、病気というような容貌じゃなかった。そじゃけん、いま生きとる人で〔藤本さ

んの]手を握手した人はうちぐらいかな。まだ他におるかしれんけどな。増さんやら、前田一雄さんやら、青木伸一さん、中村盛彦(もりひこ)、そういう人、4、5人で面会に行つて、握手してな。ほんと手も足も顔貌も、病人のような人じゃなかった。そういう人を密告[する人がおつて]、事が始まつた。そじゃけん、ほんとに、国の政策ちゆうかな、やっぱり、ハンセン病患者狩りから藤本事件が始まつた。そら、実際に、殺人を犯したか犯さんか、わたしたちにはわからんけどな。元はやっぱり、国の法律で患者狩りっていうか、強制隔離の、やっぱり象徴的な存在じゃないかと思うな<sup>17</sup>。

<sup>17</sup> 補充聞き取り。「[このあいだ]最高裁の調査官(はんじ)を含めた4人(よつたり)で来(こ)らしたもんな。非公開で裁判をしたといふことの調査じゃつたけんな。杉野[芳武]君が[2014年12月]24日。25日に志村[康]とうちが、うんとやかましく、実際のことを言うて聞かした。2時間ぐらいしゃべくつた。憲法ではな、公開で裁判をするといふのに[なつとるのに]、非公開で裁判をしたといふことじゃ。恵楓園で出張裁判をした件数をな、調べてもろうた。園の日記にぜんぶ書いて[ある]。恵楓園でしたとは32回。そのほか[菊池]医療刑務所で[もして]る。——うちはもう、言うとは言うたよ。国賠訴訟で政府と国会はちゃんと謝罪してな、厚労大臣の坂口さんたちが来たり、そして全国の新聞に謝罪広告したけど、法務省関係はいっさいナシのつぶてじゃつた。いまになつてな、遅いじゃないかと、ちつと、とつちめた。」

以下は、これに関連する新聞報道である。「ハンセン病：元患者『記憶の全て話す』／『特別法廷』23日から調査／最高裁が聞き取り」の見出しの『毎日新聞』2014.12.20 東京夕刊。

ハンセン病患者の裁判が、裁判所外の「特別法廷」で開かれていた問題で、最高裁が今月23～25日、特別法廷の傍聴経験がある元患者らに聞き取り調査を実施する。最高裁では特別法廷の開廷を決めた手続きが、国家賠償訴訟で違憲とされた不当な隔離政策に基づくものでなかったか検証を進めているが、残っている記録が少ないため、当時の状況を知る関係者に直接経緯を聞くことにした。

聞き取りをするのは、熊本県合志市の国立ハンセン病療養所「菊池恵楓園」に入所し、当時特別法廷を傍聴した元患者2人と、療養所関係者ら計7人前後。(中略)

#### ◇背丈超える幕で隠す

熊本県の「菊池恵楓園」に入所し、最高裁の聞き取りを受けることになっている元患者2人が取材に応じ、「特別法廷」の実態を語ってくれた。「記憶に残っている全てを話す。人権を侵害された元患者らのため最高裁は誤りを認めてわびてほしい」。そんな思いで聞き取りに臨むという。

「何をしているのか全く分からず、近付けなかった」。長州次郎さん(87)＝仮名＝は、元患者の男性が無実を訴えながら殺人罪などで死刑となった「菊池事件」の初公判当時の様子を振り返った。

初公判が開かれたのは1951年。恵楓園の入所者自治会事務所の入り口前に、背丈を超える高さの幕が張られたという。中に入ることはばかられ、何が起きているのか分からなかった。居合わせた入所者から、事務所内で元患者の裁判が開かれていると聞いた。「裁判は公開が原則でしょ。目隠しをするのは法律違反じゃないかと思った」

1年後には、映画や歌舞伎を見るための園内の公会堂でも元患者の裁判が開かれた。入り口から中をのぞくと、裁判官が普段身に着ける黒い法衣ではなく、白衣を着た人が行き来するのが見えたが、声は聞こえなかったという。

園は高い塀で囲われて外部と隔離され、自由に外出することすらできなかった。特別法廷は、野外に設置されたテントや公会堂の中に張り巡らされた幕の中で開かれた。裁判をしていることは告知されていなかった。(以下略)

### 自治会創立の大先輩に可愛がられて

〔恵楓園の自治会の創立は〕大正15年6月〔19日〕ちゅうけえ、うちが来たときにはもうちゃんとあった。〔当時の自治会は、園の側の御用をするような〕そういう面とな、やっぱり〔入所者同士〕助け合う面と、両方があってな。自治会の総代さんは、園長任命。——うちが18号っていう寮（へや）〔に入ったら、おんなし部屋に〕会長をした金丸勇一（かなまる・ゆういち）さんっていうてな、自治会創立委員のひとり〔がおって〕。それともうひとり、創立委員の中山三次（さんじ）さんちゅう人が、うちの寮の裏、20寮におってな。〔大先輩たちが〕うちをよお可愛がってくれた。自治会創立の人と〔親しく〕話ができて、いろいろ教えを受けたのは、うちだけじゃろう。金丸さんはカトリックの人。売店の主任やらをしてな。宮崎出身の人だったけど、手はこっから〔手のひらの半分が〕なくてな。生姜のような手じゃった。〔それでも〕ガーゼをつかむときには、ここにちょうどくぼみがあって〔親指とのあいだで〕ガーゼをつかみよったたい。それで、片義足じゃった。で、そんな偉い人とは思わんけん。わたしはその金丸さんを、いつも友達のように扱（あつこ）うてな。〔金丸さんが〕いろいろ文句を言うと、義足を棚の上へあげたりしてな、悪いことしよった（笑い）。そじゃけん、もう、かわゆうて仕方ないように可愛がられたけど。〔わたしは〕恵楓園に来てもな、もう腕白で、先輩にかわいがられて、悪いことをしよった。

〔自治会が園長に対してもの申すようになったのは〕やっぱり、増さんの時代からじゃな。それまではな、うちのに入ったときには、松原善吉さんて人が会長じゃった。いまの盲人会〔館〕のところに、自治会事務所があった。新患者が入ったら、会長に挨拶に行くわけだよ。新患者係が連れて行ってな。それで、そのときに、松原善吉さんていう会長が、どういふこと言うたかっていうと、「あんたの家族にこういう病人はおらんか」とかいうことを聞いた覚えがあるたいな。やっぱり、癩予防法に沿ったような活動を〔当時の〕自治会はしちよったんじゃないか、というふうにいまは考える。松原さんは、終戦後には、菊池の山を開いて、木炭製造をする主任になってな。そして片一方は、芦北のほうでな、塩焼き。終戦後、物資が少なかったけん。

### 恵楓園の「白内障友の会」の会長も

〔聞き取りの最中に、看護師が長州さんの目の処置に来てくれて〕目が乾燥せんようにな、軟膏を入れてるんだ。兎眼（とがん）ちゅうてな、目がつぶらんわけたい。それで、角膜が乾燥して、傷ができるから、軟膏やら脂をさしてな。

うちの家内が熊本大学〔病院〕で角膜移植して、きれいに見えるごとになった。それが、洗濯をしよってな、毛布ちゅうかちつと重量のある洗濯をして、手があれじゃけん、こうしてしたら、パッと目をはじいた。それで、角膜移植したあれがはじけてな、虹彩まで飛び出て。それですぐまた大学へ行って、虹彩を押し込んで、縫い合わせた。それで、片一方がすこおしは見えるけどな。恵楓園〔の入所者〕で角膜移植、5人か10人ぐらいしたけど、うちの家内が角膜移植では成功のうち。で、自己責任で目をはじいて目の調子が悪うなったとはしょうがないけど。どうにか目はまったく見えんことじゃないわけ。そじゃけん、盲人っていうてもピンからキリまであって、こっちに窓があったら明かり

が見えるっていう人(と)も盲人。まったく真っ暗闇も、盲人じゃけん。盲人の種類でも、格段の相違があるたい。

わたしは、無医村〔状態ちゅうか恵楓園に〕眼科の医者がおらん時代、昭和20年代に、虹彩炎を起こしてな。もう霞(かすみ)がかかるとな状態、自然治癒にはなかなかいかん。いまだったら、コーチゾンとかで炎症を防いでな、虹彩を守る〔ことができるのだけど〕。それから、うちは、診てもらおうと、瞳が針を突いたぐらいしか、小さいたい。そじゃけん、アトロピンちゅって、瞳孔を広げる目薬をさしたら、新聞でもよう見えるけど。ふつうは、天眼鏡を持って見たら、見える。それ以外は見えん。

もう一つは、白内障の手術をしちよる。白内障というのは、水晶体が濁って〔見えにくくなるわけ〕。それを砕いて、掃除機のようなとで吸い出して、水晶体の濁りを取って、そこにレンズをひっかけるわけだいな。わたしの場合、虹彩炎をしちよるけん、水晶体〔の濁り〕だけ取って、メガネで矯正する。ここにあるような、〔分厚い〕ひどいメガネ。老眼鏡はふつう〔度数が〕1か2かぐらいだけ、これは8と10の老眼鏡。それを掛けて、その上に天眼鏡で、新聞を読むような。そじゃけん、うちはいま「白内障友の会」っていう園内の障害者団体の会長をしちよる。いまんとこ105人おりますけど。〔入所者の〕3分の1〔近い〕。まだ入会せん人もおるけん。いま〔入所者が〕371名か2名じゃけん、その半分以上は、この白内障の症状。白内障の原因は、まだよわからんけども、ハンセン病の後遺症として、水晶体が濁って白内障になる人。それから、放射線によって白内障〔になる人〕。一般の人、家ん中じゃなくて、家屋外で労働すると、紫外線が目に入るたいな。やっぱり、紫外線でも白内障が進むっていうことは医学的に明らかになつちよる。水晶体が濁る原因は、だいたいそういうところにあるらしい。

### 予防法改正闘争／自用費闘争／「医者よこせ、看護婦よこせ」闘争

〔昭和28年の予防法改正闘争のことは覚えているか、だつて?〕はいはい。昭和27年、8年ごろは、〔われわれの全国組織を〕全患協って言いよったけど。その当時は、園から出ることを「脱走」って言いよった。そじゃけん、恵楓園からも増重文さん、前田一雄さん、河村杉男さん、加納敏克さん、そういう人たちが多磨全生園に会合してな。そして、予防法改正〔を要求して〕国会へ。ああ、もう1人、荒木正(あらか・ただし)。いまも社会で生きとる。こういう話、なんでもん知つちよるけど、耳が遠(とお)おしてな、なかなか億劫(おっくう)で、話はしてくれん。——もう、そういうことで、脱走つちゅうか、監禁〔室〕に入る覚悟で、東京〔の多磨全生園〕に集まってな。そうして、らい予防法改正、とくに強制隔離を廃止するように〔要求〕したけど<sup>18</sup>、いわゆる三園長の証言でおじゃんになってな。もう、〔三園長の〕言うとおりにな。平成8年までの〔らい〕予防法の通りになった。その当時な、〔社会党の〕長谷川保さんとかな、ほんとうに人権の感覚、認識のある代議士が衆議院、参議院にだいぶんおらした。それで、社会党から予防法改正の原案を示すようになった

<sup>18</sup> 補充聞き取り。「強制隔離と、裁判なしで監禁〔室〕に入れる懲戒検束権、そして、たとえばうちが病気なら家族ぜんぶを疑い裸にしての家族検診、この3つの廃止〔を要求した〕。」



〔途端に〕、厚生省からな、「わたしたちに任せてくれんか」っていうふうにして、その後の予防法ができて。もう少しな、いまのような議員提案ちゅうか、そういうとを勉強した社会党員がおって、強引にやってくれていたら、その当時、強制隔離が外されたんじゃないかと思うけどな。やっぱり、厚生省に「任してくれんか」って言われて、やむを得ずな。

その当時、共産党は最左翼。マルクス・レーニン主義、『資本論』や『共産党宣言』に基づいた政党だっというふうにして、わたしも終戦後、共産党に入ろうか社会党に入ろうか迷った時代があった。でも、やっぱり、社会党〔のほう〕が〔国民大衆から〕認知されるあれがあると思うてな、園内で、増さん、前田さん、河村杉男さん、そのほかの人たちと一緒に、社会党〔の支部〕を結成したけど。その後、対立政党として、自民党の支援団体ができた。それは何かというと、軍人軍属遺家族援護法<sup>19</sup>——国の財政が少し上向いた中で、戦争に行った軍人・軍属〔とそ〕の遺家族を援護せんやいかんじじゃないかって、自民党が自分たちの票田をつくるために、そういうふう〔な法律を作った〕。そして、園内でもな、そういう勢力が〔台頭してくる〕。〔同じハンセン病患者でも〕兵隊から、軍属から帰った人は、比較的健康度がよかった。それで、嫁さんもらうにも、そういう財政的な根拠があって、やっぱり生活が安定するけん、そういう人に結婚する女性（ひと）が多（おお）なってな。軍人軍属遺家族援護法に基づいて補助が永久にあるっていう夫婦が増えて、それがすべて自民党支持者になったわけだ。それで、恵楓園のなかでも、それに対抗するために、うちたちがな、革新政党を〔盛り立てたわけ〕。全国、おんなしですよ。全国の療養所ぜんぶ、そぎゃんになった。

〔軍人・軍属で〕ハンセン病〔になった人がその援護法の対象となった〕根拠はな、宮崎松記園長が、「戦争らい」ちゅって、戦争に行つて過酷な生活状況の中でハンセン病が発病したっていう論文を発表（だ）したわけ。——それ〔自体〕は正しいたい。うちが旧制中学で病気が発病したっていうのを考えてみるとな、20キロか30キロぐらいある強行軍をな、銃を担いで、背囊（はいのう）を担いで、徒競走で走るような軍事教練をやらされて。もうとにかく疲れて。旧制中学、2階に教室があった。〔そういうきつい軍事教練のあと〕階段を、普通の友達は何と何と上る。うちは、脚（こ）が強張（こわ）ばって強張（こわ）ばってな、上がれんとたい。いま考えてみてな、やっぱり、ハンセン病の原因で筋肉が退化しちよって、それを酷使して。もう〔軍事教練が始まって〕1週間か10日で、階段を上るとに、エッコラソッコラで。友達は、サッサッサッサ。そじゃけん、そういう過酷な軍事教練をして、発病を誘発したんじゃないかなあっというふうにしてな。

それから、障害年金の問題なんか、うちはタッチしとる。昭和35年からな、〔入所者のなかでも、身体の〕不自由な一級障害、二級障害の人は、障害年金をもらうようになったわけだ。それで、元気な、手足のいい、障害のない人がな、それは不公平じゃないかって。〔園内の患者作業で〕いくら働いても賃金は安い。で、働かない人が障害年金をもらうようになったわけ。それで、障害もない人が作業従事者会っというふうな組織を作つて、決起をしてな。——

<sup>19</sup> 正式には、1952年制定の「戦傷病者戦没者遺族等援護法」のことを言っているのだと思われる。

その当時、うちが〔自治会〕事務所において、中村ちゆって、いま認知症になっておるけど。うちが会長しよるときに、あれが副会長。あれが会長すつときに、わたしが副会長して、兄弟以上の付き合いで。「わたしが死んだら、後の葬式その他、中村盛彦に頼む」っていう公正証書、遺言状を福祉〔課〕に預けて〔ある〕。——あれは昭和40年か昭和41年か、〔ハンセン病療養所入所者全員に障害年金相当額を出せという〕自用費闘争っていうがあったわけな<sup>20</sup>。そのときも、ふたりで東京に行つてな。その当時は、来年度の〔国家〕予算が、8月がヒアリングの期限じゃった。それでも、8月のお盆前に帰れるなら幸せっていうようなことな。厚生省の近くに旧海軍省の宿舎があつて、そこに〔泊まり込み〕。ランニングシャツ、パンツ、10枚ぐらい持って行つてな。汚れたのをぶら下げて、何日前の乾いたやつを履き替えてな。そうして、8月の13日に〔陳情団が〕解散になつてな。いまは新幹線とか特急とかあるけど、その当時は在来線で各駅停車しかなかった時代。それで、岡山の愛生園の人が、「とにかく大阪まで一緒に行こうじゃないか」っていうふうにして大阪まで行つてな。大阪まで行けば、大阪埠頭から別府に行く船があつたたい。長島愛生園の人が「愛生園に泊まっていかなか」ちゆう話もしてくれたけど、とにかくそのころ、全患協の運動、真面目に「みんなのために」って、もう観光なんて考えんでな。食うや食わずで、一生懸命、運動の中心になつてきてな。そうして、大阪埠頭から別府に上がつて。そこから豊肥線（ほうひせん）で帰つてきたことがある。そのとき、大阪から別府に行く夜の船の中でな、定員オーバーで、甲板に寝たよ。

そして、もう一回、いちばん苦労したのは、「医者よこせ、看護婦よこせ」の問題で、東京の消防会館で決起集会を開いてな。それで首相官邸をぐるりと回つてな。その当時は、まだ全患協なんて力も弱いしな。いちばん〔闘争に〕寄与（あれ）したとは、全医労の人と、それから〔結核療養所の〕患者団体の日患同盟。その人たちが一生懸命、プラカードして、ゼッケンをつけて。そして、ずうっと、8月の——いまは84〔歳〕であれだけ、まだ40代ぐらいの、元気があるときじゃけえ、耐え忍んだけどな——もう暑いとに、首相官邸をぐるりいーっと取り巻いて、「医者よこせ、看護婦よこせ」って、拡声器で、全医労の人、日患同盟〔の人〕がしてくれて。そして、ビルの窓から、珍しそうにな、こうして見るじゃない。で、「ハンセン病は感染力がまったく弱い病気であります」とか拡声器で言うて、行進してな。全国〔のハンセン病療養所〕から〔結集したけど〕、恵楓園からも10何名行つた。

〔かつては〕交通〔事情〕がまったく〔ひどかった〕。昭和53年に熊本（ここ）の飛行場ができる前、増さんの時代は普通列車。増さんたちの予防法闘争のときには、各駅停車の鈍行列車で24時間かかって上野まで行つた。そして、多磨全生園に行つてな。あそこの公会堂でいろいろ〔集会〕して。各園の園長が、多磨の園長に、すぐ解散させ、〔みんなを全生園から〕放り出すようにちゆうて圧力かけるなかで、厚生省の、首相官邸の前に座り込みして頑張つたけども、ダメじゃった。

<sup>20</sup> 『自治会50年史』の「年譜」によれば、「昭和45.12 二階堂代議士（自副幹事長）自用費について全患協に約束」「昭和46.4 自用費（患者給与金、従来の患者慰安金に代わるもの）が拠出制年金にスライドされることになった」とある。

昭和30年〔代〕が終わり、〔昭和〕40年代になって、「あそ」号とか、「ひのくに」とか、「さつま」、「はやぶさ」〔など〕、鹿児島発、八代発、熊本発の急行列車がいろいろできてな、12時間ぐらいで上野に着くようになった。それで、〔東京まで〕陳情〔に行くのも〕だいぶん楽になった。その次にできたのが、寝台列車。ベッドに寝たまんまでな。それで、うちは、ふるさとの家がな、山陽本線の〔線路から〕100メートルぐらいのところにあるわけ。そっで、下関から宇部を過ぎたころにな、うちはこそと寝台から降りてデッキに行つて、こうしてな。もう、わが家が見えるか見えんかな。その前の、寝台でない特急列車のときには、座席じゃけん。「ちょっと、わが家、見てくるけん」ちゅつて。各駅停車やら寝台でない列車に乗るときには、4人掛けでな。2人、2人じゃろ。それで、真ん中に板を敷いたり、下に新聞敷(ひ)いたりして、寝て。そういうことで、わが家の近くを何回か通つて。もう、一瞬のことだけけん、やっぱり、ふるさとっていうものは懐かしいもんでな。たあだ、そこを見るだけで、ああつて思うて、心が休まるようなことだったよ。

そして、昭和53年に〔熊本の〕高遊原(たかゆばる)の飛行場ができて。恵楓園(こい)から〔車で〕35分、40分で飛行場に到着。そして、飛行機に乗れば、2時間余りで羽田に着く。それで、モノレールに乗って……。うちが昭和53年、4年、5年か、そのごろ会長しよつたが、その当時は、いまのようにホテルに泊まるっち〔いっても〕理解がない。そじゃけん、泊まる場所は多磨全生園の宿舎。そこに行くまでが大変じゃつたけん。それで、多磨全生園の人に頼んで、白タクたい。それで夕方着いたら、夕飯がないわけだい。いまは、「1,000円のお弁当持って来い」つて言つたら、どこでん持ってくるけどな。当時は飲食店が少なくて、もう食事するとに往生した。そじゃけん、食事をとろうと、あそこの電車で埼玉県のほうに行つて、苦勞したことをいま思うけどな。そういう苦勞をしたことを帰つてきていろいろ話をするけどな、「ああ、ご苦勞さん」つて口では言うけど、やっぱり、自治会の活動、全患協の活動への理解が少ない時代が続いたな。極楽トンボのような入園者が多かった。

### 人権と民主主義を守る自治会の火を灯し続けたい

〔平成8年のらい予防法廃止はうれしかったですか、だつて?〕うれしいどころじゃない。あれは〔予防法が廃止になるというので〕大谷〔藤郎〕さんが来たときか。うちと荒木さんが代表でな、感謝の言葉を述べた記憶があるたい。そんなときを覚えちよつとが、「早く来い来いお正月」つていう〔ような気持ちで〕な、「早く予防法が廃止になって、ほんとに幸せな療養所になるように、待ち望む」つていうようなことを、うちは言うたように思うたい。

そして、いまだん忘れんけど、予防法廃止の前の年、平成7年の10月に、全患協の代表者会議が〔東京の〕多磨〔全生園〕であつた。そんなときに、うちの〔自治会の会長は〕河岸(かし)〔渉(わたる)〕つていう人。それで、河岸会長が、〔自分は〕自民党員じゃけど、社会党員の中村君を、常任で経理委員じゃつたけん、「代表者会議に〔代わりに〕行つてくれ」つて、〔東京へ〕やつたわけ。それで恵楓園に帰つてきて、報告。全患協は支部長の多数決で議決するようになつちよつた。〔中村君は〕予防法が廃止されても金銭的物質的な補償は要求しないという決議〔がなされたという〕報告(はなし)をしたわけ。それで、人権にかかわることで憲法に保障されたことだけけん、「それは承認でき

ん」と言うて、うちと荒木さんだけが反対したけど、〔中央委員会〕賛成多数で承認された。それで、大谷〔藤郎〕さんの発言、全国の〔ハンセン病療養所〕所長連盟の決議もあって〔予防法廃止が現実のものとなった〕。そして、国賠訴訟〔が提訴された〕。〔その段階で〕河岸会長がアンケートを取ったわけ。「全患協では、予防法を廃止しても金銭その他（ほか）いろいろな補償は要求しないということを決議しておるが、〔それでも〕国賠訴訟を支援するか、〔それとも〕静観するか」というようなアンケートの文言を作ったわけ。それにも、わたしは、そういうアンケートは取るべきじゃないと。菊池恵楓園〔自治会〕の規約、創立の精神からして、民主主義そして人権を尊重するということが第一に謳われておる。そういうことをないがしろにするようなアンケートはまかりならんと。〔しかし、アンケートの実施が〕6対5で可決された。〔当時、自治会の副会長だった〕太田明は、国賠訴訟で被告の政府厚生省の立場に立ったようなことを『菊池野』に書いた。〔原告たちは〕1億円要求しとると。それで〔裁判に負けたら〕療養所から追い出されて生活に困るんじゃないかというようなことをな。

そじゃけえ、いま、恵楓園の自治会〔執行部の組閣〕がでけんのはな、〔中央委員選挙に〕4人〔だけ〕立候補して……。うちは84になるけん、足を洗おうと思って、もう立候補せんじやった。それから、志村とか工藤も杉野も、稲葉さんも、立候補せんじやった。それで、太田明〔ほか〕4人（よったり）が立候補してな。〔やむをえず〕次の自治会役員が成立するように「おまえたち話し合え」というふうにしたけど。太田明君は「おれが会長するけん、副会長してくれ」って、療養所〔内〕をいっぱい回ったけど、1人も加勢する人がおらんやった。ていうのはな、やっぱり、人間は人のつながりで〔動く〕。あれは、大学を出ちよるちゅうけど、相愛互助とかいろいろの園内の伝統的な風習ちゅうかな、そういうことに無関心。やっぱり、なんかのつながりがないと、おんなし仕事をして、上下関係で、うまくいくはずはない。そじゃけん、いまの自治会役員は、8月の末まで暫定で自治会を運営しちよるけど、それが済んだら、菊池恵楓園の自治会は休会になります。菊池恵楓園の自治会も、風前の灯火。アッハハハハ。

〔こういう話は〕人に言われんけど、工藤には、もう6年前に、「うちだったら、こぎゃんときに会長引き受けるぞ」って。「うちが応援するけん、やってみらんか」ちって、工藤に会長をしてもろうた。それで、おんなし寮（へや）に志村がおったけん。「おまえ、3ヵ月でええけん、副会長せい」ちって言うて。中村君は、うちの弟分じゃけん、経理委員。それから、稲葉さんと杉野に〔も入ってもらって〕執行部を作ったわけ。

〔その前にな〕うちがいちばん目えかけた杉野にな、うちより入所が長いし、真面目じゃけん、な、「おまえ、会長せい」って言うて、何日もうちは杉野を説得した。でも、杉野は胸が悪いし、いろいろ合併症があるけん。「そんなに言うなら、おれは中央委員も辞める」っち。そこまでうちに言うけん、な、「わかった」って。工藤に「おまえ、不安じゃろうけど……」もう、あんた、自治会の仕事をしたこともない、全患協の中執はちよとしたけどな、あんなぐらいの経験で、よお工藤は、自治会の会長をしてくれたと思っている。うちももう、あれがすることは〔なんでん〕加勢してな。人が悪う言うんなら、前に出て説得して。〔それから〕もう6年過ぎたけん。そして、合併症ちゅうか、前立

腺ガンで、「もう、おれはいかん」ちゅって〔この前の選挙に〕立候補せんじやった。だいたい自治会のしきたりからすると、会長が辞めたら、副会長が跡継ぎの中心にならんやいかんけどな。志村も、去年、肺炎を3回もしてな、「もう立候補せん」って。そして、普通だったらな、次の会長を副会長がせんなら、他の常任〔委員〕、杉野か稲葉さんというふうになるわけだ。うちは、稲葉さんが〔自治会役員の仕事を〕一生懸命した〔ことを知つとる〕けん。まだ公の場で「稲葉さん、あんた、会長してくれんか」って発言はせんけどな。太田君が出てくるなら、稲葉（あれ）を立てようと、そぎゃん思うとる。あんたたちにはじめて言うけどな、まだ公に、稲葉さんを担ぐとか志村を担ぐとかいうことは言うたことない。なぜ言わんかちゅと、うちがもう限界じゃけん。〔うちは〕引退しようと思うちよるけん。中央委員におって、もう悪いことなんでん、うちが前に出て庇（かば）うようなことがでけん。もう少し若けりゃあな、「やれ。おれが縁の下の力持ちをするけん」って言うて、諫（いさ）めるばってん。うちは、家内も入院しとるし、84にもなるけん、もう引退を決めちよるけん、そこまでの応援できんところたい。でも、なんとか、志村か稲葉さんにやってもらいたい。

あんた、中〔修一〕君て知つちよる？ あれは、うちが会長したときに、涉外〔委員〕なんかして加勢してくれたけん。いまは〔社会復帰して〕健康者の嫁さんをもろうて、ノホホンとしちよるけど。それがな、将来構想委員会で、こういうことを〔言った〕。——予防法廃止のときに、由布園長がな、自治会に来て、「懲戒検束権、一回おれはやってみたかった」って言うたって。懲戒検束権って、あんた、裁判にかけんで〔処罰を科するもので〕憲法違反も甚だしい。それをたい、会長、副会長〔はじめ〕みんながおるところで、園長が冗談でもそういうこと言うたら、ただちに反論せんやいかんときに、「ハハハ」って笑（わろ）ちやつちゅ。その他（ほか）〔にも〕、自治会の名を騙（かた）って、自民党の衆議院議員に推薦状を出した。自治会は、熊本選挙区から出た人は誰でも超党派で〔われわれを〕支持してくれるように、議員懇談会に入ってもらちよるけどな。〔特定の〕個人に、あんた、〔第一次安倍内閣農林水産大臣在任中の2007年に〕自殺した松岡利勝、あれへ菊池恵楓園自治会名で推薦状を出した。もう全然、うちたちには一言も話さんで、そういうことをしてな。まあ、松岡利勝も死んでしもうたけん、それで終わりじゃろうけど。やっぱり、人権と民主主義は守る姿勢の灯（ともしび）を消したらいかんと思う。

〔国賠裁判では原告になったか、だつて？〕うちは遅れて〔名前を公表せず〕番号で原告になった。500何番じゃったかな。後のほう。それでも、自治会の中央委員会なんか〔では〕、原告団の主旨に賛成した発言をずうっと続けてな。それはもう誰でん知つとることだけど。やっぱり、家族との関係で了解が得られんじゃったけん。ひょっとしてマスコミやらに〔名前が出はせんか〕ってというような危惧じゃろうたいな。〔原告になったのは〕判決が出て、全療協〔中央本部〕から〔みんな原告に〕入れ入れって指示があつて、控訴断念の前に、うちも10人ぐらい誘って入つとる。

〔懸案の恵楓園の〕将来構想は、前の合志市の市長がな、ひじょうに理解があつた。自治労出身の人で。いまん市長（と）は、自民党の人じゃけん、もう理解がだいぶん薄いたい。——まあ、前の市長のときに、市が主催するような形で将来構想委員会をやってくれた。もちろん恵楓園自治会とタイアップした

形でやったけどな、やっぱり市の力がな、ひじょうに幸いした。で、まあ、いろいろあるけど、恵楓園の社会化っていうことで、第一に狙ったのは保育所の問題な。

#### 4 段の将棋と 300 鉢の盆栽と 欠かさぬ晩酌が趣味

いまでん、わたしは趣味で将棋しております。将棋 4 段。〔園内の文化会館に〕碁会所、将棋会場がある。将棋は、毎週金曜日にな、市の人に来て、そこで対局をして楽しむ。まあ多いとき 5, 6 人。年に 1 回か 2 回か合志市、それから泗水（しすい）とか菊池市から、20 人ばかり来て、大会を開きますけどな。囲碁は熊本県庁、熊本福祉囲碁の会、それから肥後銀行の人とか合志市の人とか。やっぱり、毎週木曜日は 20 人ぐらい来ります。それでけっこう社会交流しております。

それから、わたしは長年、盆栽会の会長をしちよる。県庁のロビーで毎年 5 月と 10 月に盆栽展示即売会をしちよって。今年も 5 月は 209 鉢出して 178 鉢売れた。うちももう手足が悪いけど、とにかく体は動かさんといかんて思うてな、いま、朝 5 時すぎに起きてな、涼しいうち 1 時間ぐらい、盆水に水やり。300 鉢ぐらいあるけん。昼は暑うして、熱中症にかかる。

それから、「白内障友の会」っていう身体障害者団体の会長。それして楽しむちゅうかな、入園者の相談相手をしよるです。やっぱり、体動かさんとな。もう、1 週間寝台に寝ちよったら、足腰がふらふら。いまでん、ふらふら。〔この聞き取りで〕妙なこと言わんじやったか。うちは晩酌、焼酎とビール 350 ミリ飲んでな。365 日、風邪ひいたっちゃ、頭が痛かったっちゃあな、焼酎とビールは〔欠かさん〕。アッハハハハハ。

## Kept Raising the Flag of Anti-Conservatism: Interview at Kikuchi-Keifūen, a Hansen's Disease Facility

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSACA

This is the life story of a man in his 80s who is living in Kikuchi-Keifūen, a Hansen's disease facility.

Mr. Jiro Choshu (his pen name in the Hansen's disease facility) was born in Yamaguchi Prefecture in 1927. His Hansen's disease symptom began when he was 4th grade of a commercial school. On August 13, 1943, his two uncles (one was the father side and the other was mother side) brought him to Kikuchi-Keifūen in Kumamoto Prefecture.

The interview was held in the interviewee's dormitory room on July 9, 2011. It was a long interview which took 4 and a half hours. Interviewers were Yasunori Fukuoka and Ai Kurosaka. The interviewee was 84 years old at the moment of the interview.

His life story can be categorized by 3 big themes. The first one is the

memory with his mother and hometown. Since Mr. Choshu lost his father when he was young, he has had a strong bond with his mother. In the moment of farewell at Ogori station, Mr. Choshu handed his student commuter pass that he would not use any longer to his mother, and she carefully received it with her handkerchief. He reminded that sad moment with tearful voice. His relatives made up the story of Mr. Choshu's birth that he was the child born outside of marriage, the affair between his father and a show girl, because his sister was about to marry a man who would succeed Mr. Choshu's household. They fabricated this story to hide family history of Hansen's disease and banned Mr. Choshu to visit hometown. In fact, Mr. Choshu had visited hometown only one time in 1947 even in the nighttime not to be seen by other people. After the Segregation Policy was abolished in 1996, the Yamaguchi Prefecture helped the Hansen's disease ex-patients come back home and Mr. Choshu had a chance to visit his mother. However it was at a public park, not his family house. Next year, his mother passed away at the age of 100, but Mr. Choshu received the notice 7 days later. Every year, he visits the hometown and always looks over his family house from 100 meters away in a taxi.

The second theme of his life story is his criticism on the poor treatment at Kikuchi-Keifuen. He entered the facility in 1943 when the war was going on. Until Japan was defeated 2 years later, he became the subject of the clinical test for the medicine *Koha* that the Japanese imperial army requested to the facility. This medicine caused a deadly gastro spasm once a month. Promin, developed as the wonder-drug for Hansen's disease after the war, also gave him several aftereffects. He got heavy neuralgia and hand descensus. Even more, he did not have proper treatment for iris inflammation, one of the characteristic complications of Hansen's disease, because Kikuchi-Keifuen did not have an ophthalmologist. Consequently, his iris inflammation was developed to cataract. Currently he is serving as the representative of the Cataract Patients Group in Kikuchi-Keifuen. In 1948, he got married to a woman whom he met in the facility. His wife got pregnant and was forced to have an abortion. Mr. Choshu also had a sterilization surgery. He told these experiences in tearful voice.

The last theme is his face as the oldest champion of Social Democratic Party of Japan, still raising the flag of anti-conservatism. According to his mention, the residents' association of Kikuchi-Keifuen had two characters: a company union and a mutual aid for the residents. However, it became conservative as the residents with military service experience and benefits for disabled soldiers increased. Against this

tendency, Mr. Choshu and other young people raised the flag of anti-conservatism under the leadership of Shigefumi Masu, and built the Kikuchi-Keifuen branch of the Social Democratic Party of Japan. At the maximum, this branch once had over 100 members. They participated in fighting for necessity allowance and also in the 'Sending Doctors and Nurses to Us' movement, visiting Tokyo to appeal to the Government. At that time there was no airport or Shinkansen, so they had to endure long distance train trips. At the time of this interview, Mr. Choshu worried about the future of the administration of the residents' association. He had kept his service as the board member and devoted himself to the administration since 1961. Fortunately, the association is still functioning properly thanks to the effort of senior board members.

On February 1 and 2, 2015, the interviewers read the interview script in front of Mr. Choshu to get his affirmation. We practiced the follow-up interview as well.

**Key words:** Hansen's disease, Segregation Policy, life story